


英語教育中核教員育成研修

令和6年度  
授業改善  
プロジェクト  
報告書



アクション・リサーチによる  
高等学校英語授業での実践研究

## 目 次

「英語教育中核教員育成研修」とは	1
「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト	3
<b>「聞くこと」に関わる指導</b>	
意欲を引き出すリスニング指導	5
リスニング処理を意識した指導	9
<b>「読むこと」に関わる指導</b>	
概要や要点を的確に理解する力を伸ばすリーディング指導	13
ロジックに焦点を当てたリーディング指導	17
速く正確に読む力を伸ばす指導	21
効率的で的確な読みを促すリーディング指導	25
<b>「話すこと【やり取り】」に関わる指導</b>	
自信をもって社会的な話題についてやり取りする力を養う指導	29
<b>「話すこと【発表】」に関わる指導</b>	
CLILの手法によるスピーキング指導	33
読んだ英文の内容を自分の言葉で伝えるスピーキング指導	37
自分の考えを即興で自信を持って述べる力を伸ばすスピーキング指導	41
<b>「書くこと」に関わる指導</b>	
基礎的な書く力を伸ばす指導	45

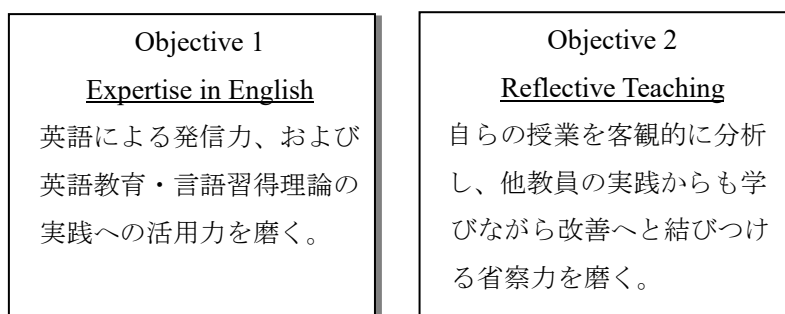
\*それぞれの実践レポートの内容については、言語活動の呼称などに関し、厳密な用語の統一はしていません。

## 英語教育中核教員育成研修とは

### ○ 英語教育中核教員育成研修のねらい

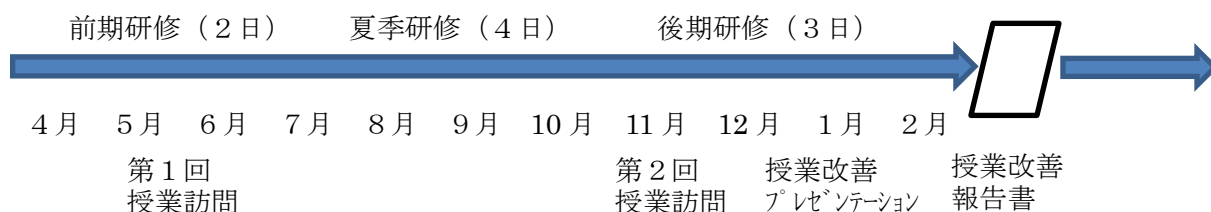
英語教育中核教員育成研修は、神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを目指し、国際言語文化アカデミアが県教育委員会との連携のもと実施してきた「英語教育アドヴァンスト研修（平成23年～令和2年）」の内容に基づき、令和3年度から総合教育センターにおいて開講されました。

集合研修9日（前期2日、夏季4日、後期3日）、勤務校での授業研究2日（前期・後期各半日、研修担当者訪問）から構成される合計11日間のプログラムは、「英語教師の専門知識、英語による発信力」「授業研究、授業改善」を二つの大きな柱としています。



### ○ 研修成果を生かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのより良い生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし、教師であれば授業改善の複雑さ・難しさは身をもって経験しています。そこで中核教員育成研修では、集合研修において英語力、英語教育に関する専門知識を高めながら、勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



### ○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は三つあります。第一に、研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に、報告書の内容を他の英語科教員と共有することで、授業改善に関するアイデア創出に資すること。第三に、高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで、英語教育や教師教育に関わる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

#### 授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について、読者に参考となる情報を個人情報保護に留意して記述する。
3. 実践報告については、理想論にとらわれず、現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者に分かるように記述する。
5. データ処理や分析については、統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れ、授業改善の手だての効果を記述する。

本研修の実施及び本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

## 「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト

### ○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

#### 1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりを改めて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するという体験をします。

#### 2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に多くの時間を費やしてしまい、生徒に自己表現をあまりさせていない。

教科書英文の読解活動には取り組むが、初見の英文に対応できる読解力が育っていない。

#### 3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

#### 4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

#### 5. 改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」及び「改善の目安(数値目標)」として明確に言語化します。

#### 6. 目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) プレリーディング活動を工夫すれば、興味や背景知識が活性化され、主体的に読解に取り組むようになるだろう。

#### 7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

#### 8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

## ○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさがありますが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をともなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やししながら、より良い授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

## ○ 過去のテーマ分類

国際言語文化アカデミアにおける「英語教育アドヴァンスト研修」を含めた、過去の受講者が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると、次の表のようになります。平成 26 年度までは、「動機付け・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが、平成 27 年度からは、『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し、4 技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
聞くこと	0	1	0	0	1	1	2	2	2	0
話すこと	2	1	2	7	9	4	7	3	7	4
読むこと	5	4	4	6	11	8	6	6	4	4
書くこと	4	4	3	3	4	2	0	4	2	1
動機付け・学習意欲	6	3	1	5	—	—	—	—	—	—
語彙・文法	3	1	2	3	—	—	—	—	—	—
計	20	14	13	25	25	15	15	15	15	9

\*1：「技能統合型」

	R3	R4	R5	R6
聞くこと	4	1	4	2
読むこと	5	3	2	4
話すこと【やり取り】	8	2	6	1
話すこと【発表】	4	1	3	3
書くこと	3	3	1	1
計	24	10	16	11

※R3年度より、話すこと【やり取り】【発表】の領域を設定し、掲載をLRSWの順としています。

## 意欲を引き出すリスニング指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は9クラス 311名（男子 159名、女子 152名）の生徒である。落ち着いて授業に参加できる雰囲気は整っており、ペアワークや個別の学習活動に積極的に取り組む生徒が多い。他方、中学校レベルの基礎的な知識・技能が身に付いていない生徒や英語の学習自体に苦手意識を持っている生徒も多い。

### 解決すべき課題

リスニングタスクに粘り強く最後まで取り組まない生徒が多いが、これは単語の知識や文法の背景を想像する力不足が要因と思われる。4技能の中でも特に苦手意識の強いリスニングタスクに取り組む意欲を引き出し、生徒にとって身近な話題について概要や要点を聞き取る力を向上させたい。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数 209、調査対象のうち7クラスで実施）

1. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（複数回答可）

聞く力	読む力	話す力	書く力
121人(57.9%)	98人(46.9%)	133人(63.6%)	108人(51.7%)

2. 英語を聞くことについて、どのようなことを聞き取れるようになりたいですか。（複数回答可）

交通機関等の簡単なアナウンス	日常会話での相手の発話	作業や行動のための手順や指示	テレビドラマや映画のセリフ
74人(35.4%)	158人(75.6%)	50人(23.9%)	98人(46.9%)

3. 英語を聞く力に自信はありますか。

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
13人(6.2%)	32人(15.3%)	82人(39.2%)	82人(39.2%)

4. 英語を聞く力を伸ばしたいと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
123人(58.9%)	70人(33.5%)	9人(4.3%)	7人(3.3%)

### <分析と考察>

アンケートの結果では、授業を通して「話す力」と「聞く力」を伸ばしたいと考えている生徒がそれぞれ 63.6%、57.9%と多くを占めた。「日常会話での相手の発話」と「テレビドラマや映画のセリフ」を聞き取れるようになりたい生徒がそれぞれ 75.6%、46.9%と多く、海外発信のメディアへ高い関心を寄せていることが分かった。一方、英語を聞く力に「(どちらかといえば) 自信がない」と 78.5%の生徒が回答していることから、多くの生徒がリスニングに苦手意識を持っていることも分かった。英語を聞く力を伸ばしたいと思いますかという質問に対し「(どちらかといえば) そう思う」と 92.3%もの生徒が考えており、生徒たちにとって身近な話題について興味・関心を持たせながらじっくりとリスニング指導をする必要性を感じた。

#### ・第1回リスニングテスト（5月実施【第2部】・9月実施【第3部】：受験者数 284・269）

内容：英検3級のリスニングテストの第2部（会話の内容に関する質問に答える）と第3部（短いパッセージの内容に関する質問に答える）から10問ずつ、計20問（各10点満点）を出題した。

	平均点 (正答率)	標準偏差	最高点	最低点	6割以上正答
第2部 会話（10問）	5.1 (51.0%)	1.96	10	1	120人(42.3%)
第3部 短いパッセージ (10問)	4.4 (44.0%)	2.39	10	0	97人(36.1%)

### <分析と考察>

中学卒業程度が目安とされている英検3級のリスニングテストで「第2部会話」の正答率が51.0%、「第3部短いパッセージ」の正答率が44.0%と、高校2年生としてはやや低い数値が出た。また、会話よりも、短いパッセージの方が、多くの生徒にとって難易度が上がることが明らかになった。

### リサーチ・クエスチョン

意欲を引き出し、身近な話題についての会話や短いパッセージを聞いて、概要や要点を理解する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検3級のリスニングテストで、「第2部会話」、「第3部短いパッセージ」で6割以上正答の生徒がそれぞれ全体の6割以上になる。

### 改善のための手立て

- トップダウン処理で内容に関する導入をすれば、スキーマが活性化して興味・関心が高まり、諦めずにリスニングができるようになるだろう。
  - ・ プレリスニング活動としてリスニング内容に関するオーラルイントロダクションをし、背景知識に関する情報を与える。
  - ・ 教科書本文・副教材や動画に関して、キーワードや写真等から内容を予測させる。

- ボトムアップ処理能力向上のために明示的な音声指導をすれば、文脈や内容のつながりが分かり、よりの確に概要や要点を理解できるようになるだろう。
  - ・ 内容理解の鍵となる語を中心に、単語や重要表現を事前に指導する。
  - ・ リンキング、リダクション、フラッピング等、英語特有の音の変化を明示的に解説する。
  - ・ イントネーションを意識し、気持ちを込めたスラッシュリーディングや、ディクテーションに取り組ませる。
  - ・ ロイロノートを活用し、個人での音読やペアでの会話を記録させ、適宜、クラス全体で共有し、より良いパフォーマンスへの動機付けをする。
  
- 多くの支援を与えてリスニングに取り組ませれば、背景知識を活用できることで自信が付き、意欲を引き出すことができるだろう。
  - ・ 単元に関連した内容が短時間でまとめられていて、かつ、生徒たちが理解しやすい英語レベルの動画をし、動画を観ながら聞き取る活動に取り組ませる。
  - ・ 自作のワークシート「Information Grid」を使用し、リスニング 1 回目はキーワードの聞き取り、2 回目は要点問題、3 回目はサマリーの作成と、スモールステップで取り組ませる。リスニングに苦手意識の強い生徒が概要や要点を把握することを支援し、語彙リストも与える。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 第 2 回リスニングテスト（12 月実施：受験者数 291）

	平均点 (正答率)	標準偏差	最高点	最低点	6 割以上正答
第 2 部 会話（10 問）	6.3 (63.0%)	2.07	10	1	194 人(66.7%)
第 3 部 短いパッセージ (10 問)	5.5 (55.0%)	2.19	10	0	132 人(45.4%)

#### <分析と考察>

「第 2 部会話」では 6 割以上正答の生徒が 66.7%で、改善の目安とした全体の 6 割以上となった。「第 3 部短いパッセージ」では 6 割以上正答の生徒が 45.4%と改善の目安の 6 割以上に届かなかった。第 1 回のテストから平均点は約 1 点上昇し、事前・事後のデータが揃う 268 人について、「第 2 部会話」「第 3 部短いパッセージ」とともに有意性が認められ ( $t$ 検定、 $p = .000 < .001$ )、聞く力の向上のために実践した手立てには一定の効果があったと言える。

- ・ 第 2 回英語学習に関するアンケート（12 月実施：回答者数 283）

#### 1. どの活動があなたの聞く力の向上に有効でしたか。（複数回答可）

動画を観ながら聞き取る (Information Grid)	教科書本文を聞き取る (T/F 問題)	副教材を用いて聞き取る	教員によるオーラル イントロダクション
106 人(37.5%)	141 人(49.8%)	145 人(51.2%)	41 人(14.5%)

## 2. 英語を聞く力に自信はありますか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
40人 (14.1%)	93人 (32.9%)	100人 (35.3%)	50人 (17.7%)

### <分析と考察>

英語を聞く力の向上に、「教科書本文を聞き取る」と「副教材を用いて聞き取る」活動については約50%の生徒が、「動画を観ながら聞き取る」活動については37.5%の生徒が有効と回答し、成果を生徒たち自身が感じていると言える。また、英語を聞く力に「(どちらかといえば) 自信がある」と47.0%の生徒が回答し、事前アンケートの21.5%から大幅に増加したことから、多くの生徒がリスニングへの苦手意識を克服し、自信を持ったことが分かる。アンケートについては Wilcoxon の符号付順位検定の結果、統計的に有意な伸びが確認された ( $p = .000 < .001$ ,  $r = 0.79$ )。

### 教師の変化

生徒がリスニングタスクに対して意欲的に取り組むための工夫を、授業展開が円滑に進んだクラスとそうでないクラスとで比較し柔軟に対応し続けたことで、生徒の成長や意識の変化を感じられる機会が増えた。また、ほかの科目担当者たちの協力を得られたことで、学年全体の英語を聞き取る力を底上げすることができたことが何よりも大きな喜びであった。教育活動における同僚性の重要性を再認識した。

### 今後の課題 (次の改善点など)

今後も継続的に授業案について科目担当者間でよく話し合い、準備することが必要だろう。また、定点観測として学期ごとのリスニング調査及びアンケート調査を通じて生徒の実態を把握し、授業案の再考にいかすべきだと考える。生徒はスマートフォンを通じて世界につながっている。自学のための楽しくおしゃれな英語学習アプリやサイトを教員側から生徒側へ発信していくことも検討すべきだろう。

### まとめ・感想

本研修で設定したリスニング指導は、実は一番苦手な領域であった。文献資料や他教員からの助言を参考にし、何とか成果に結びつけることができた。今後も努力を惜しまず、生徒のニーズに応える授業をデザインし、他教員と協働しながら授業を実践したい。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

鈴木寿一・門田修平(編著). (2018). 『英語リスニング指導ハンドブック』大修館書店.

Brown, S. (2013). *Listening Myths*. The University of Michigan Press.

## リスニング処理を意識した指導

科目名	英語入門（学校設定科目）、 英語コミュニケーションⅠ	学年	1、2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	-------------------------------	----	-----	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は1年生12名、2年生3名の計15名（男子8名、女子7名）の定時制高校在籍の生徒である。中学校レベルの基本的な語彙や文法の多くは未定着で、英語に限らず勉強全般に対する苦手意識が強い生徒が多く、小中学校で不登校を経験した生徒もいる。授業中の活動には一生懸命取り組む生徒がほとんどである。多くは就職を希望しているが、専門学校や大学に進学を希望している生徒もいる。

### 解決すべき課題

普段の授業やALTの授業において、英語での発問を理解できている生徒は少ない。簡単な英語であっても、意味を理解しながら聞いたり話したりすることは難しい生徒が多い。英語でのリスニング技能に特化した指導は行えておらず、定期テストにおいてもリスニングの問題は出題できていない。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数13）

#### 1. 英語の学習は楽しいですか。

楽しい	どちらかといえば 楽しい	どちらかといえば 楽しくない	楽しくない
7人(53.8%)	5人(38.5%)	1人(7.7%)	0人(0.0%)

#### 2. この授業で、英語に関するどのような知識や力を伸ばしたいですか。（複数回答）

聞く力	読む力	話す力	書く力	単語や熟語	文法
11人(84.6%)	9人(69.2%)	7人(53.8%)	7人(53.8%)	6人(46.2%)	6人(46.2%)

#### 3. 英語を聞く力に自信がありますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
2人(15.4%)	3人(23.1%)	4人(30.8%)	4人(30.8%)

### <分析と考察>

英語の授業が「(どちらかといえば)楽しい」と答えた生徒が92.3%もいたことに驚かされた。伸ばしたい英語の知識や力に関しては、「聞く力」が84.6%と最も多く、次いで「読む力」が69.2%であった。英語の学習を頑張りたいと考えている生徒が多かった。一方で、英語を聞く力に自信がある生徒は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて38.5%のみにとどまり、他の技能でも同様の

傾向であった。聞く力が伸びれば教師やほかの生徒の発言を理解して主体的な授業参加が見込めること、また生徒も聞く力を伸ばしたいと考えていることから、聞く力を伸ばすことをこの研究の目標とした。

・第1回リスニングテスト（5月実施：受験者数14）

英検4級のリスニングテストより、①ダイアログを聞いて内容一致問題に答える（4択の選択問題）10問、②モノログを聞いて内容一致問題に答える（4択の選択問題）10問の計20問に取り組み、英語を聞き取る力を調べた。

	N	平均点	最大値	最小値	標準偏差	7割以上正答
ダイアログ(10問)	14	4.9	9	1	2.50	4人(28.6%)
モノログ(10問)	14	5.4	9	2	1.91	4人(28.6%)
合計点	14	10.2(51.1%)	16	5	3.75	3人(21.4%)

実際の英検のテストでは、英文が放送された後に設問も英語で読み上げられ、問題冊子には印刷されておらず、選択肢は英語で記載されている。しかし、設問の英語を聞き取れずに回答できない場合を除外するため、また選択肢の英語を読む力の影響を減らすため、本調査では設問と選択肢を日本語に訳し、いずれも問題用紙に記載してテストを実施した。

<分析と考察>

テストの英文ははっきりと2度繰り返し読まれたものの、正答率は51.1%にとどまった。1年生の中には、およそ16分間（ダイアログとモノログの間に休憩あり）のテストの後半には集中力が切れてしまっている生徒も複数いた。英語力の伸長はもちろんのこと、集中力向上の必要性も感じた。授業を通して、学習に取り組む姿勢も育みたい。

リサーチ・クエスチョン

身近で日常的な話題についてのダイアログやモノログを聞いて、概要や要点を理解する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安:英検4級のリスニングテスト(20問)で7割以上正答する生徒が全体の7割以上になる。

改善のための手立て

門田(2015)によると、リスニング処理は、①音声入力を知覚する「知覚段階」と、②知覚した音声を基に、語彙処理、統語処理、意味処理、文脈処理、スキーマ処理の五つの処理を同時かつ相互に進める「理解段階」の二つの段階からなる。これらの処理の自動化を目指し、以下の二つの手立てを実施した。

- まとまりのある英語を聞いて概要や要点を日本語で書き取る活動を繰り返し行えば、初めて聞く英文の概要や要点を聞き取れるようになるだろう。
  - ・高校入門レベルのリスニング教材を利用し、リスニングに特化したトレーニングを全10回実施する。また、1学期末と2学期末の定期テストでも同様の問題を出題する。

- ・各回のトレーニングでは、まず単語／語句レベルの聞き取り問題に取り組み、全体で発音の練習と答えの確認をする。その後、それらの単語／語句が使われているまとまりのある英語を聞き、日本語の穴埋め形式で概要と要点を書き取る活動をする。

○ 会話文での頻出表現を継続的に指導すれば、初めて聞く英文であっても内容を聞き取れるようになるだろう。

- ・中学生向けの会話練習教材に掲載されているワークシート（以下、「会話表現 WS」）を活用して、会話での頻出表現を指導する。会話表現 WS は、1 枚につき英日左右対照で 25 個の会話表現が練習できるようになっている。各学期に 1 枚ずつ、計 2 枚の会話表現 WS に取り組ませる。
- ・授業ではスピーキングの帯活動として、毎回 5～10 分程度練習する。スピーキングの活動を行うことで、授業の雰囲気作りや生徒への効果的な動機付けにつなげることもねらいとする。
- ・これらの表現を範囲として、スピーキングテストを各学期 1 回実施する。1 分間で、日本語で言われた表現をできるだけ多く英語で言う。また、定期テストでも出題する。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第 2 回英語学習に関するアンケート（12 月実施：回答者数 12）

1. 4 月と比べて、英語を聞く力は伸びましたか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
4 人(33.3%)	8 人(66.7%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)

2. 授業で実施した 2 種類のリスニングトレーニングは、英語力の向上に役立ちましたか。

	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
リスニング教材	9 人(75.0%)	3 人(25.0%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)
会話表現 WS	9 人(75.0%)	3 人(25.0%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)

#### <分析と考察>

生徒の自己評価では全員が 4 月と比較して英語を聞く力が伸びていると感じていた。また、二つの手立てに対する生徒からの評価は高く、活動に否定的な考えを持っていた生徒が誰もいなかったことは大変良かった。

- ・第 2 回リスニングテスト（12 月実施：受験者数 12）

第 1 回と同様のリスニングテストを実施した。

	N	平均点	最大値	最小値	標準偏差	7 割以上正答
ダイアログ(10 問)	12	7.3	10	4	1.64	9 人(75.0%)
モノログ(10 問)	12	4.6	10	1	2.63	3 人(25.0%)
全体	12	11.8(59.2%)	20	5	4.12	5 人(41.7%)

## <分析と考察>

テスト全体の正答率は 59.2%であった。改善の目安とした「7割以上正答する生徒が全体の7割以上」に関しては、7割以上正答した生徒が 41.7%で、目標を達成できなかった。しかし、ダイアローグの問題だけに限ると、75.0%の生徒が7割以上正解し、部分的にはあるが目標は達成された。

5月の第1回リスニングテストと比較するために、2回のテストをいずれも受けた12名の結果を用いて Wilcoxon の符号付順位検定を実施したところ、

(i)ダイアローグ(5月:4.8→12月:7.3)は、有意な伸びが確認された( $p = .004 < .01, r = 0.88$ )。

(ii)モノローグ(5月:5.4→12月:4.6)は、統計的に有意な差は確認されなかった( $p = .217, n.s.$ )。

(iii)全体(5月:10.1→12月:11.8)は、有意な伸びが確認された( $p = .026 < .05, r = 0.64$ )。

なお、モノローグは伸びずダイアローグだけが伸びた理由として、リスニングテストの問題の会話文中に登場した六つの慣用表現が会話表現 WS で扱ったものと同じであったことで、英文内容の理解が容易になったのではないかと考えられる。

## 教師の変化

今回、熟達度テストである英検を指標としてより客観的に生徒の状況を知ることで、様々な角度から授業の進め方を意識することができた。英語が極めて苦手な生徒たちが会話表現 WS のスピーキングテストに向けて自発的に練習している姿を見たことで、どんな生徒にも英語をできるようになりたいという願いがあり、教師はその願いに応えなければならないとの思いが強くなった。

## 今後の課題(次の改善点など)

今回成果が見られなかったモノローグを聞く力を身に付けさせる指導を考えたい。また、対象生徒の数が少なかったため、より多くの生徒に対してもリスニングの指導を実施したい。

## まとめ・感想

1年間の研修の受講を通して、目標に基づいた授業デザインの大切さを再認識するとともに、講師の先生方やほかの受講者から理論と実践の両面から多くの助言や刺激をもらい、大変でありながらも充実した時間であった。アクション・リサーチでは客観的な数値を基に実際の授業を構想し、一定の成果を出せたので、今回の経験を生かして今後も授業改善に取り組んでいきたい。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

Nation, I.S.P., & Newton, J. (2020). *Teaching ESL/EFL Listening and Speaking*. Routledge.

門田修平. (2015). 『シャドーイング・音読と英語コミュニケーションの科学』コスモピア

金谷憲(監修). (2016). 『Listening Pilot Level 1 新訂版』東京書籍.

瀧沢広人. (2013). 『中学生のためのすらすら英会話 100』明治図書出版.

樋口忠彦(監修)、高橋一幸(編集者代表). (2019). 『Q&A 高校英語指導法事典—現場の悩み 133 に答える』教育出版.

## 概要や要点を的確に理解する力を伸ばすリーディング指導

科目名	英語コミュニケーションⅢ	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス79名（男子32名、女子47名）の生徒である。英語学習に対して前向きで積極的な生徒が多い一方、苦手意識を感じている生徒もあり、クラス内での学力の差は大きい。ほとんどの生徒が四年制大学への進学を希望しており、そのうちの半数以上が一般選抜での進学を目指している。

### 解決すべき課題

単語や文法などの知識がリーディングの技能に十分にかかれておらず、その結果英語を読むことに対して自信を持っていない様子が見られる。読解方略の指導をし、まとまった英文の内容を的確に理解することができたという成功体験を積むことで自信を持たせ、主体的に学習に取り組む姿勢につながることを期待したい。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数73）

#### 1. 英語は楽しいと思いますか？

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえば楽しくない	楽しくない
12人(16.4%)	38人(52.1%)	15人(20.5%)	8人(11.0%)

#### 2. 自分の英語力に自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
0人(0.0%)	8人(11.0%)	30人(41.1%)	35人(47.9%)

#### 3. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？（複数回答可）

英語を聞く力	英語を読む力	英語を話す力	英語を書く力	単語や熟語の知識	文法の知識
43人(58.9%)	49人(67.1%)	41人(56.2%)	29人(39.7%)	36人(49.3%)	42人(57.5%)

### <分析と考察>

英語学習が「楽しい」と答えた割合（16.4%）と「どちらかといえば楽しい」と答えた割合（52.1%）を合わせると約68.5%となり、3分の2以上の生徒は英語学習について前向きに捉えている一方で、自身の英語力について「自信がある」と答えた生徒はおらず、自信を持っていない層が圧倒的多数（「どちらかといえば自信がない」と「自信がない」を合わせて89.0%）で、自己評価の低さが目立

つ。伸ばしたい力については、「英語を読む力」(67.1%)が最も多く挙げられ、次に「英語を聞く力」(58.9%)、「英語を話す力」(56.2%)、「文法の知識」(57.5%)と続いた。高校3年生になり、大学受験を意識し始めた結果、入試で問われることの多いリーディングやリスニングといった受容的スキルを重視する傾向を示している。

・第1回リーディングテストの結果（5月実施：受験者数 76）

まとまりのある英文を読んで概要や要点を理解する力がどれくらい身に付いているのか調べるために、英検2級第3問ABC（計12問）を24分間で実施した。問題は全問多肢選択式で、解答データは1問1点の12点満点で採点した。

平均点	標準偏差	最高点	最低点	8点(約65%)以上の生徒	4点(約35%)以下の生徒
6.32点	2.88	12点	1点	28人(36.8%)	24人(31.6%)

<分析と考察>

平均点は6.32点で、正答率は約52.7%であった。標準偏差が2.88と比較的大きく、生徒間でリーディング力に差が見られる。36.8%の生徒が8点以上得点しており、リーディングに一定の力を持っているこの層には、適切な課題を提供することで更なるスキル向上を目指したい。一方、4点以下であった、基礎的なリーディング力に課題がある層(31.6%)については、読解力不足だけでなく、単語や文法の基礎力に欠けている可能性が考えられるため、短い文章や要点を捉えやすい課題から始め、段階的にリーディング力を伸ばすためのサポートが必要であると思われる。

リサーチ・クエスチョン

社会的な話題についての英文を読み、概要や要点を的確に理解する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：・英検2級のリーディングテストで、8点以上の生徒が、全体の5割以上になる。
- ・英検2級のリーディングテストで、4点以下の生徒が、全体の1割以下になる。

改善のための手立て

- ディスコースマーカーやパラグラフの関係性を明示的に指導すれば、論理の流れをつかむことができ、概要や要点を的確に理解できるようになるだろう。
  - ・リーディングのタスクの前にディスコースマーカーを明示的に解説する。
  - ・アウトプット活動にもディスコースマーカーを意識して取り組ませる。
- リーディングタスクを工夫すれば、概要や要点を正確に把握できるようになるだろう。
  - ・タイトルから本文の内容を推測するタスクに取り組ませる。
  - ・パラグラフごとにタイトルをつける問題に取り組ませる。下位層には段階的な指導を心掛ける。
  - ・推論発問を与え、ペアで意見交換する機会を設ける。

- ・ワークシートや定期試験に、要点問題だけでなく、概要問題を設定する。

○ 未知語を推測して読む方法を指導すれば、分からない単語に出会ったときに、推測して概要や要点をつかむ努力をするようになるだろう。

- ・リーディングの前に語彙の支援を与えすぎないようにする。
- ・接頭辞や接尾辞や語の成り立ちを明示的に指導する。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回リーディングテストの結果（11月実施：受験者数 64）＊形式は第1回と同じ

平均点	標準偏差	最高点	最低点	8点(約65%)以上の生徒	4点(約35%)以下の生徒
8.05点	2.87	12点	2点	33人(51.6%)	5人(7.8%)

#### <分析と考察>

第2回リーディングテストでは、平均点が1.73点上昇した。改善の目安とした5割以上には届かなかったものの、8点以上の生徒の割合は14.8ポイント増の51.6%であった。また、4点以下の生徒の割合は23.8ポイント減の7.8%で、改善の目安の1割以下を達成することができた。さらに、第1回、第2回を共に受験した生徒の結果に対処のあるt検定を行ったところ、有意な伸長が示され( $p < .001$ )、また中程度の効果量が得られた( $d = 0.78$ )。すなわち、生徒の読む力は向上したと言える。

	受験者数	平均値	標準偏差	最高点	最低点
第1回	62人	6.44点	2.98	12点	1点
第2回	62人	8.06点	2.85	12点	2点

- ・第2回英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数 62）

#### 1. 英語は楽しいと思いますか？

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえば楽しくない	楽しくない
21人(33.9%)	23人(37.1%)	13人(21.0%)	5人(8.1%)

#### 2. 自分の英語力に自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
5人(8.1%)	13人(21.0%)	25人(40.3%)	19人(30.6%)

#### 3. 各手立ては「英文を読み、概要や要点を的確に理解する力」の向上に有効だったと感じますか？

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
ディスコースマーカーの明示的な指導	35人(56.5%)	26人(41.9%)	1人(1.6%)	0人(0.0%)
タイトルから本文の内容を推測する活動	41人(66.1%)	20人(32.3%)	1人(1.6%)	0人(0.0%)
パラグラフ毎にタイトルをつける活動	39人(62.9%)	20人(32.3%)	2人(3.2%)	1人(1.6%)

未知語を推測する活動	41人(66.1%)	19人(30.6%)	2人(3.2%)	0人(0.0%)
------------	------------	------------	----------	----------

### <分析と考察>

第1回アンケートで、英語学習について「(どちらかといえば) 楽しい」と回答した割合は68.5%だったのに対し、第2回では71.0%であった。Wilcoxon検定では有意ではなかったが( $p=0.099$ )、特に「楽しい」と回答した割合が16.4%から33.9%に大幅に上昇しており、授業内容が英語に対するポジティブな感情をある程度促したことが分かる。英語力に対する自信については、第1回において「自信がある」「どちらかといえば自信がある」の合計は11.0%だったのに対し、第2回における同様の回答は29.0%であった。一方、「自信がない」という回答は47.9%から30.6%に減少した。Wilcoxon検定でも有意な上昇があることが示され( $p<0.001$ )、生徒の「自信のレベル」が向上したことは成果として挙げられる。手立てに対する効用感については、全ての手立てについて95.0%を超えるポジティブな回答が得られた。このことから、各活動が「英文を読み、概要や要点を的確に理解する力」の向上に効果的であると認識されており、実際に生徒の読む力の向上につながった可能性がある。

### 教師の変化

これまでの授業では語彙・文法などの知識を詰め込むことを意識し、リーディングの技能の指導にあまり重点を置いていなかった。今回のアクション・リサーチでリーディングをテーマにすることにより、自らの指導について振り返り、指導法や教室での活動について多くの知見を得る良い機会となった。結果的に、リーディング活動において幅広い活動を行い、生徒たちがそれらの活動の有効性を実感し、前向きに英文読解に取り組む姿を見ることができ、授業改善に積極的に取り組む重要性を再認識することができた。また、研究を通じて校内の他の教員や研修で出会った受講者の方々から多くの助言をいただき、それが今回の大きな収穫の一つとなった。

### 今後の課題(次の改善点など)

リーディング能力向上のための手立てが単発的な活動になってしまい、体系的に行うことができなかったことが反省である。単元の指導と評価の計画段階から、リーディング指導に有効な活動を体系的に計画し、組織的に授業改善を行なっていくことで、学校全体のリーディング能力向上に向けて働きかけていきたい。

### まとめ・感想

この研修を通じて、授業設計や指導と評価の在り方など、多岐にわたる内容を深く学ぶことができた。この経験は、今後の授業改善にとって大きな支えとなると感じている。また、一緒に研修を受けた他校の教員の取組や考えに触れることで、自身の授業を見直す貴重な機会にもなった。この研修で得た知識や経験を基に試行錯誤を重ね、日々より良い授業を目指していくとともに、神奈川県の中核を担う英語教員として校内の英語科をリードし、組織的な授業改善を図っていきたい。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司(編著). (2011). 『英語で英語を読む授業』 研究社.

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』 大修館書店.

根岸雅史(著). (2017). 『テストが導く英語教育改革「無責任なテスト」への処方箋』 三省堂.

## ロジックに焦点を当てたリーディング指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス118名（男子71名、女子47名）の生徒である。多くの生徒が英語学習に対して前向きで、授業に積極的に取り組み、学習意欲は高い。進路に関しては、例年多くの生徒が国公立大学を始めとする難関大学へ進学している。

### 解決すべき課題

論説文などを読んで、概要や要点を的確に捉えられていないケースが少なからず見受けられる。多くの生徒が、ロジック（段落構成や情報構造、対比、抽象と具体、言い換え表現など）を意識せず、主に語彙や文法の知識に基づいて、英文を理解しようとしているように思われる。ロジックを理解し、それを手掛かりにして、よりの確に内容を理解する力を身に付けさせたい。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

#### ・第1回リーディングテスト（5月実施：受験者数112）

内容：英検2級と準1級の大問2と3から、2級8問、準1級6問、合計14問を出題、解答時間26分で実施した。1問1点14点満点で採点した。

結果：

平均点 (正答率)	標準偏差	最高点	最低点	得点0～ 4点	得点5～ 8点	得点9～ 14点
7.8点 (55.7%)	2.31	14点	2点	11人 (9.8%)	55人 (49.1%)	46人 (41.1%)

\*級別平均点／正答率 2級：5.7点／71.3%（8点満点） 準1級：2.1点／35.0%（6点満点）

#### ・第1回リーディングテストアンケート（5月実施：回答者数110）

質問：英語の文章を読解する際、意識していることは何ですか？

語彙	文法	ロジック (文章構造等)	筆者の意見	特になし	その他
31人(28.2%)	24人(21.8%)	20人(18.2%)	27人(24.5%)	6人(5.5%)	2人(1.8%)

#### <分析と考察>

テストで、得点9～14点の生徒の割合は41.1%だった。全体の正答率は55.7%、級別では、2級

71.3%、準1級 35.0%で、準1級でかなり低かった。準1級は2級と問題形式は似ているが、使用される語彙や文法などが難しくなる。このような問題にも対応できる読解力を身に付けさせるには、ロジックを理解させることが必須である。アンケートで、読解する際、ロジックを意識している生徒は18.2%と他の項目と比べて低かったことから、ロジックを読解に活用する方法を指導することで、的確に内容を理解する力が伸ばせるのではないかと。

## リサーチ・クエスチョン

エッセイや論説文を読んで、自信を持って内容を的確に理解する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検2級と準1級の問題を活用した第2回リーディングテスト（14問）で、得点9～14点の生徒の割合が全体の70.0%以上になる。

## 改善のための手立て

- 英語の論理構造を意識した文章読解の指導を工夫すれば、主観的で感覚的な読解による誤読が減り、筆者の意見等をより正確に読み取ることができるようになるだろう。
  - ・各段落に見出しをつけ、段落の役割を分析するなど、段落構成や文章の全体の構成を確認するタスクを設け、論理構造への意識を高める。
  - ・段落構成、抽象と具体、対比、言い換え等のロジックに焦点を当てた読解問題に取り組み、学んだことを意識して未知語の推測や文章の内容、情報を整理させる。
  - ・文章を分析・評価する発問やタスクを組み入れ、主体的に読解する姿勢を養う。具体的には時系列や対比など文章の論理構造を考察できるワークシートに取り組みさせる。
  
- 学んだリーディングストラテジーを活用する機会を設ければ、よりの確に内容を読み取ることができるようになるだろう。
  - ・単元のテーマに関連した初見の英文を用いた読解演習を通して、リーディングストラテジーを実際に活用して読解する機会を設ける。
  - ・個々に初見の英文の読解に取り組みさせた後、ロジックを活用した読解の方法についてクラス全体へフィードバックを行う。
  
- 論理性を意識したアウトプット活動を行えば、英語のロジックが身に付き、読解に役立てることができるようになるだろう。
  - ・読んだ文章に関連するテーマ等について、読解で学んだ抽象と具体、対比や言い換えなどを用いて、段落構成を意識したエッセイライティングを行う。
  - ・適宜ミニディベートに取り組み、能動的に論理性を身に付けさせる。
  - ・ある事象や単語を、対比や言い換え、具体例などを用いて英語で説明するペア活動に取り組みさせる。生徒の実際の説明をクラス全体で共有し、その論理構造を分析する。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回リーディングテスト（12月実施：受験者数104）

内容：第1回リーディングテストと同じ

結果：

平均点 (正答率)	標準偏差	最高点	最低点	得点0～ 4点	得点5～ 8点	得点9～ 14点
9.0点 (64.3%)	2.43	13点	3点	7人 (6.7%)	29人 (27.9%)	68人 (65.4%)

\*級別平均点／正答率 2級：6.8点／85.0%（8点満点） 準1級：2.2点／36.7%（6点満点）

- ・第2回リーディングテストアンケート（12月実施：回答者数100）

1. 英語の文章を読解する際、意識していることは何ですか？

語彙	文法	ロジック (文章構造等)	筆者の意見	特になし	その他
25人(25.0%)	21人(21.0%)	28人(28.0%)	15人(15.0%)	11人(11.0%)	0人(0.0%)

2. 第1回リーディングテストを受けた時と比べて英文の読解力が上がったと思いますか？

はい	いいえ
74人(74.0%)	26人(26.0%)

### <分析と考察>

第2回のリーディングテストで得点9～14点の生徒の割合は全体の65.4%で、改善の目安とした70.0%以上には届かなかったが、この値は第1回のテストから24.3ポイント上昇した。また、平均点は第1回の7.8点から9.0点に上昇し、 $t$ 検定（対応のあるデータ）を行った結果、有意な向上が認められた（ $t(98)=-4.41, p<.01$ ）。さらに、級別の平均点の伸びについても $t$ 検定（対応のあるデータ）を行った結果、2級でのみ有意な向上が認められた（ $t(98)=-6.21, p<.01$ ）。

第2回のアンケートで、読解する際、ロジックを意識していると回答した生徒の割合は28.0%で、第1回の18.2%から9.8ポイントの有意な上昇が認められた（Wilcoxon 符号付順位和検定  $p=0.00596$ ）。授業におけるロジックの意識づけ、活用法の指導がある程度浸透したのではないかと思われる。また、第1回のテスト時と比べて読解力が上がったと思う生徒の割合は74.0%であった。これらの結果から、指導がある程度、生徒の読解力の向上につながったのではないかと思われる。

## 教師の変化

- ・英語の論理構造に指導の重点を置くことで、英語という言語の本質を探るために英語史など、これまであまり触れてこなかった分野について見識を深めることができた。その結果、英語をより多面的に見るようになった。
- ・日常生活においてもロジックは深く浸透していることを意識するようになった。その結果、難解な論

理構造を生徒の身近な話題と結び付けてどのように指導するか試行錯誤を繰り返す中で、授業計画や展開をこれまでよりも工夫することが多くなった。

- ・今回、具体的な目標と手立てを持って授業実践に取り組んだが、時折、実践内容が本当に生徒にとって良いものか悩むこともあった。しかし思い切って生徒と率直な意見交換をすることで、生徒と一緒に授業を進めていると実感でき、生徒との関係性が重要であることに改めて気付かされた。

### 今後の課題（次の改善点など）

- ・すべての英文が明確な論理構造に基づいているわけではないので、ロジック指導に適した文章を選択する必要がある。今回も扱う文章によって指導に濃淡が出たため、徹底しきれなかった部分があった。
- ・論理構造を軸にリーディングストラテジーを指導したが、單元ごとで単発的な指導になり、体系的で緻密な計画に基づいた指導ができなかった。年間指導計画を作成する時点で扱うストラテジーと文章を決め、1年間を通してシームレスな指導ができれば、より効果的であると思われる。

### まとめ・感想

今回のアクション・リサーチではリーディング指導を軸にした授業実践の中で読解能力の向上と結び付けてスピーキング、ライティングのアウトプット活動を行った。これまでは、いわゆる4技能5領域をそれぞれ別に捉え、それらを有機的に結び付けた指導を行っていなかった。4技能の根底となる軸が何であるか分からなかったからである。しかし今回、英語のロジックがそれら全ての根幹を成す土台であるという考えに基づいて、4技能を統合的に授業に組み入れた。その結果、生徒の課題に対する反応も良くなり、取組状況もこれまでで一番積極的であった。このようにロジック指導を軸に4技能の指導を実践できたことは今後の指導につなげる上でも大きな収穫であった。もちろん今回の授業実践において解決すべき課題は多くあるが、今後も継続してより良い授業づくりを続けていきたい。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

佐藤ヒロシ. (2013). 『英語が面白くなる 東大のディープな英語』 中経出版.

佐藤ヒロシ. (2011). 『東大英語が教えてくれる 英文正読の真相 55』 プレイス.

堀田隆一. (2011). 『125 ライブラリー005 英語史で解きほぐす英語の誤解 納得して英語を学ぶために』 中央大学出版部.

渡邊雅子. (2024). 『論理的思考とは何か』 岩波書店.

## 速く正確に読む力を伸ばす指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は1クラス38名（男子15名、女子23名）の生徒である。積極的な授業への取り組みが見られるものの、英語に苦手意識を感じている生徒もおり、クラス内での学力差は大きい。例年、ほとんどの生徒が大学へ進学、半数以上が一般選抜での進学を目指す。

### 解決すべき課題

模試の結果などでは、文法・語法問題の校内平均が全国平均を上回っているものの、長文読解ではやや課題が見られるため、それらの知識をリーディングに生かすことができていないと思われる。授業の中で生徒達から、長文を速く正確に読めるようになり、設問に対しての正答率を上げたいという声が上がっており、文を読むことに対して自信を持ってない様子が見られるため、リーディングストラテジーなどを指導し、生徒のパフォーマンスを上げ、自信を持たせる必要がある。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数38）

1. 英語の学習は楽しいと思いますか？

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえば楽しくない	楽しくない
11人(28.9%)	19人(50.0%)	8人(21.1%)	0人(0.0%)

2. 自分の英語力に自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
0人(0.0%)	16人(42.1%)	15人(39.5%)	7人(18.4%)

3. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？（複数回答可）

英語を聞く力	英語を読む力	英語を話す力	英語を書く力	単語や熟語の知識	文法の知識
30人(78.9%)	29人(76.3%)	32人(84.2%)	25人(65.8%)	27人(71.1%)	25人(65.8%)

#### <分析と考察>

英語の学習が「楽しい」と「どちらかといえば楽しい」と答えた割合は78.9%となり、3分の2以上の生徒は英語の学習を前向きに捉えていた。英語力に「自信がある」と「どちらかといえば自信がある」と答えた割合は42.1%であった。伸ばしたい力については、「英語を話す力」（84.2%）と「英

語を聞く力」(78.9%)が最も多く挙げた。

・第1回リーディングテストの結果(5月実施:受験者数33)

内容:まとまりのある英文を読んで概要や要点を理解する力がどれくらい身に付いているのか調べるために、英検2級第3問ABC(選択式17問、各1点)と、第4問要約問題(記述式1問、3点)を20点満点、40分間で実施した。

結果:

平均点 (正答率)	標準偏差	最高点	最低点	正答率65% (13点)以上 の生徒	正答率35% (7点)以下 の生徒
14.0点(70.0%)	3.33	18点	6点	20人(65.5%)	3人(10.3%)

<分析と考察>

正答率は70.0%だった。標準偏差が3.33と比較的大きく、生徒間でリーディング力に差が見られる。65.5%の生徒が正答率65%以上で、リーディングに一定の力を持っている生徒が多い集団であることを示している。正答率35%以下の生徒が10.3%存在することから、短い文章や要点を捉えやすい課題から始め、段階的に単語や文法の基礎力とリーディング力を伸ばすサポートが必要である。

リサーチ・クエスチョン

社会的話題についての説明文を速く正確に読む力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安:英検2級の問題を使った第2回リーディングテストで、正答率65%以上の生徒が全体の7割以上になる。

改善のためのリーディングストラテジーを意識した手立て

- プレリーディング活動を工夫すれば、概要や要点がつかみやすくなるだろう。
  - ・ 話題に関連する写真などの視聴覚教材を示し、読む前のスピーキング活動を行う。発問を多くし、パッセージの内容を予測させる。
  - ・ 読むために必要となる語彙や表現をオーラルイントロダクションで使用し、意味を確認しておく。
  
- リーディングストラテジーを指導し、様々なタスクに取り組みせれば、読解力を強化することができるだろう。
  - ・ 文脈から語の意味を推測すること、ディスコースマーカーを見つけること、キーワードやキーフレーズを探して読むこと、要点やメインアイデアを求めて読むことなどのリーディングストラテジーを説明し、読解活動を通して、リーディング力に応じて必要なストラテジーを必要なタイミングで採用できるよう指導する。
  - ・ スキミング、スキヤニング、サマリーライティング、要点を1文でまとめさせるなどのタスクに取り組みさせる。また、別のタスクを与えて、同じ文章を繰り返し読ませる。

- ・推論発問で深い理解と批判的な読みを促す。

○ **Timed Reading** を繰り返し練習すれば、速く正確に読むことができるようになるだろう。

- ・WPM を測り、速度を意識させる。
- ・戻り読みをさせない、意味のまとまりを一区切りとして読む（チャンク指導）など、速く読むための読み方を指導する。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回リーディングテストの結果（11月実施：受験者数 35）＊形式は第1回と同じ

平均点 (正答率)	標準偏差	最高点	最低点	正答率 65% (13点) 以上 の生徒の割合	正答率 35% (7点) 以下 の生徒の割合
14.0 点(70.0%)	3.6	19 点	1 点	22 人(65.5%)	0 人(0.0%)

#### <分析と考察>

第2回リーディングテストで正答率 65%以上の生徒の割合は 65.5%で、改善の目安とした全体の7割以上には届かなかった。平均点は第1回と同値、正答率 65%以上の生徒の割合も第1回と同値、正答率 35%以下の生徒の割合は、第1回の 10.3%から 0.0%になり、手立てが下位の生徒に効果的であった可能性がある。しかし、Wilcoxon の符号付順位検定を行ったところ残念ながら有意な伸長は認められなかった ( $p=0.593$ )。

- ・第2回英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数 35）

#### 1. 英語の学習は楽しいと思いますか？

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえば楽しくない	楽しくない
4 人(11.4%)	21 人(60.0%)	9 人(25.7%)	1 人(2.9%)

#### 2. 自分の英語力に自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
1 人(2.9%)	11 人(31.4%)	15 人(42.9%)	8 人(22.9%)

#### <分析と考察>

第2回のアンケートで、英語の学習を「楽しい」「どちらかといえば楽しい」と回答した割合は、第1回の 78.9%から 71.4%に下がり、英語力に「自信がある」と「どちらかといえば自信がある」と答えた割合は、第1回の 42.1%から 34.3%に下がり、英語の学習について、やや否定的な変化があった。「(どちらかといえば) 自信がない」と回答した生徒の記述には「英語に苦手意識がある」など、英語力を高めるために何に取り組めばよいか分からない様子が見え始める。また、単語力の不足について、多くの記述があった。

今後は、学習方法についても指導していきたい。一生懸命に英語の学習に取り組んでいるからこそ、なかなか成果が表れないことに、生徒は苦しんでいるのではないかと感じる。こうした生徒たちの一人ひとり

の課題に向き合い、指導していく必要性を感じた。

読解問題を解く生徒を観察する中で、ディスコースマーカーに着目する習慣が身に付いた生徒が増えたことなど、授業を通じた学習経験がリーディングストラテジーを必要に応じて活用できる読み手としてのスキル獲得へつながることを期待する。

## 教師の変化

これまでの授業ではリーディングの技能を伸ばすためにただ語彙・文法などの知識を詰め込むことを意識し、リーディングの技能の指導にあまり重点を置いていなかった。また、教師が良い指導をすることを重視し、生徒が今、どんな力の不足を意識し、どんな学習をしたいのかという視点に立って授業プランを練ることをあまりしてこなかった。今回のアクション・リサーチでリーディングをテーマにすることにより、自らのリーディング指導について振り返り、リーディングの指導法や教室での活動について多くの知見を得る良い機会となったことに併せて、生徒視点ファーストの授業展開を考えることの重要性を知ることができた。また、以前はリーディング活動に入る前のトピックの背景をベースにしたスピーキング活動に重きを置く傾向が強かったが、リーディングストラテジーを意識した指導をするようになり、授業改善に積極的に取り組む重要性を再認識することができた。ほかにも、研究を通じて他の教員の優れた授業を拝見し、講師の方々から多くの助言をいただいたことは、今後の授業改善のためにもかけがいのない財産となった。

## 今後の課題（次の改善点など）

手立ての一つとした読む前に行うスピーキング活動に時間をかけすぎ、全ての手立てをバランスよく展開することができなかった。特に、十分でなかったリーディングストラテジーの指導に力を入れて、今後も続けていく考えだ。また、生徒がリーディングを体系的に学ぶことができるよう、指導と評価を計画し、学校全体のリーディング能力向上に向け、同僚と共に組織的な授業改善に取り組んでいきたい。

## まとめ・感想

この研修を通じて、授業設計や指導と評価の在り方など、多岐にわたる内容を深く学ぶことができた。この経験は、今後の授業改善にとって大きな支えとなると感じている。また、一緒に研修を受けた他校の教員の取組や考えに触れることで、自身の授業を見直す貴重な機会にもなった。この研修で得た知識や経験を基に試行錯誤を重ね、日々より良い授業を目指していくとともに、神奈川県の中核を担う英語教員として校内の英語科をリードし、組織的な授業改善を図っていきたい。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店.

根岸雅史. (2017). 『テストが導く英語教育改革「無責任なテスト」への処方箋』三省堂.

卯城祐司. (2009). 『英語リーディングの化学 - 「読めたつもり」の謎を解く』研究社.

北村一真. (2021). 『英語の読み方 ニュース、SNS から小説まで』中央公論新社.

Brindley, S. (1993) *Teaching English*. The Open University.

## 効率的で的確な読みを促すリーディング指導

科目名	英語コミュニケーションⅢ	学年	3	形態	HR・習熟度・ <span style="border: 1px solid black;">小集団</span>
-----	--------------	----	---	----	---

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス 77名（男子 51名、女子 26名）の生徒である。半数以上の生徒が難関大学への進学を目指している。基本的な語彙や文法の知識が身に付いている生徒が多い。全体に向けた発問などに対して積極的に発言をする様子はあまり見られないが、英語の学習に前向きで、ほとんどの生徒がペアワークなど授業中の活動に意欲的に取り組んでいる。

### 解決すべき課題

まとまりのある英文を読む際に、一文一文は理解できても論理展開をつかめていない生徒や、読解タスクに時間がかかっている生徒が、多数見受けられる。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

#### ・第1回英語に関するアンケート（4月実施：回答者数 73）

1. 長文読解力を高めるために、現在自分の課題となっていることや、改善したい力を「語彙力」以外で選んでください。（複数回答可）

文章の要点（重要なポイント）をつかむ力	44人(60.3%)
自分の探している情報を本文中から見つけ出す力	30人(41.1%)
知らない単語が出てきた時に意味を推測して読み進める力	50人(68.5%)
文章の大まかな構造（導入－主題－具体例や説明－結論）を理解する力	21人(28.8%)
however, moreover, for instance などの表現から文章の流れを理解する力	16人(21.9%)
キーワードやキーセンテンスを見つける力	28人(38.4%)
文を意味のまとまりごとに区切って理解していく力	31人(42.5%)
その他	2人(2.7%)

2. 英語を読むことについて、どのようなことが難しいと思いますか。（自由記述より一部抜粋）

<ul style="list-style-type: none"> <li>・読んだことを覚えていられない</li> <li>・何度も読み返さないと意味が理解できない</li> <li>・素早く読むことと内容を理解しながら読むことを両立するのが難しい</li> </ul>
---

#### <分析と考察>

長文読解力に関する課題や改善したい力として、60.3%の生徒が「文章の要点（重要なポイント）」

をつかむ力」を挙げている。また、68.5%の生徒が「知らない単語が出てきた時に意味を推測して読み進める力」を課題としており、自由記述の回答にも同様の意見が複数見られた。このことから、生徒自身もまとまりのある英文を読む際にスムーズに読み進められていないと感じていると分かった。

・第1回リーディングテスト（5月実施：受験者数73）

内容：2020年度 大学入試センター試験 第6問（6問×1点の6点満点：12分）

平均点	標準偏差	6点の生徒	0点の生徒	4点以上の生徒
3.36点	1.49	4人(5.5%)	2人(2.7%)	34人(46.6%)

問題の種類別正答率

要点問題 4問	概要問題 1問	論理問題 1問
54.1%	72.6%	42.5%

<分析と考察>

6点満点中4点以上を取った生徒の割合は46.6%であった。問題の種類別に正答率を比較すると、概要問題の正答率は72.6%であったが、要点問題の正答率が54.1%、論理問題の正答率が42.5%とそれぞれ低い結果となった。この結果から、まとまりのある英文を読む際に、特に要点や論理展開を理解しながらスムーズに読むことができていないのではないかと考える。

リサーチ・クエスチョン

まとまりのある英文の概要や要点、論理展開を、効率的に的確に読み取る力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：大学入試センター試験の長文読解問題（第6問）で6点満点中4点以上正解する生徒が全体の75.0%以上になる。

改善のための手立て

- リーディングストラテジーの明示的指導を行えば、概要や要点、論理展開を的確に理解できるようになるだろう。
  - ・ 談話標識に注意を払い、論理展開を追いながら英文を読ませる。
  - ・ スキーマを活用し、場面や登場人物、内容をイメージさせ、文脈などから未知語の意味を推測させる。
  
- ポストリーディング活動を工夫すれば、目的に応じて概要や要点、論理展開を的確に読み取ることができるようになるだろう。
  - ・ サマリーライティングに取り組みさせる。パラグラフごとの概要や要点、論理展開を意識しながら読むよう指導する。
  - ・ 授業で扱った英文と同じトピックの初見の英文を読んで概要や要点を問う問題に取り組みさせる。

- ・ 読んだ英文の内容に関連する自身の経験について書くタスクなどに取り組ませる。英文を読み直し、筆者の主張や英文の論理的構成を、タスクの目的に応じてさらに深く理解するよう指導する。

○ 時間を意識して読む練習を繰り返し行えば、英文を効率的に読むことができるようになるだろう。

- ・ 300 語程度の易しめの英文を 3 分以内に読み、問いに答える活動に繰り返し取り組ませる。
- ・ 各自で WPM を計算して記録させ、自分の読みの速度を客観的に把握させる。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 第 2 回リーディングテスト（12 月実施：受験者数 71）

内容：2016 年度 大学入試センター試験 第 6 問（6 問×1 点の 6 点満点：12 分）

平均点	標準偏差	6 点の生徒	0 点の生徒	4 点以上の生徒
4.58 点	1.46	24 人(33.8%)	1 人(1.4%)	57 人(80.3%)

問題の種類別正答率

要点問題 4 問	概要問題 1 問	論理展開問題 1 問
76.8%	90.1%	60.6%

#### <分析と考察>

第 2 回リーディングテストでは、4 点以上取った生徒の割合は 80.3%となり、第 1 回の 47.0%から大きく上昇し、改善の目安とした全体の 75.0%以上を達成した。また、2 回のデータがそろっている生徒の平均点に統計学的な有意差も認められた（対応のあるデータの  $t$  検定： $p=0.00<0.05$ ）。第 1 回リーディングテストで特に正答率が低かった要点問題と論理問題の正答率を見ても、要点問題は 54.1%から 76.8%に、論理問題は 42.5%から 60.6%に上昇しており、向上が見られた。

- ・ 第 2 回英語に関するアンケート（12 月実施：回答者数 60）

質問：この 1 年間を通して改善されたと思うものを選んでください。（複数回答可）

文章の要点（重要なポイント）をつかむ力	32 人(53.3%)
自分の探している情報を本文中から見つけ出す力	20 人(33.3%)
知らない単語が出てきた時に意味を推測して読み進める力	27 人(45.0%)
その文章の大まかな構造（導入－主題－具体例や説明－結論）を理解する力	21 人(35.0%)
however, moreover, for instance などの表現から文章の流れを理解する力	24 人(40.0%)
キーワードやキーセンテンスを見つける力	15 人(25.0%)
文を意味のまとまりごとに区切って理解していく力	20 人(33.3%)

#### <分析と考察>

第 1 回のアンケートで、多くの生徒が課題として挙げた「文章の要点（重要なポイント）をつかむ力」と「知らない単語が出てきた時に意味を推測して読み進める力」について、それぞれ 53.3%、45.0%の生徒が改善されたと回答している。

## 教師の変化

生徒に身に付けさせたい力とそのために行うべき手立てについて、今まで以上によく検討して授業をデザインするようになった。また、アクション・リサーチの期間中に、生徒の反応を見ながら手立ての効果を検証し、手立てがより良いものになるよう見直し続けたことにより、生徒の活動をより充実したものにできた。

## 今後の課題（次の改善点など）

第2回リーディングテストにおいて正答率は大きく向上したが、生徒の成長実感は十分ではないのかもしれない。例えば、論理問題の正答率も向上しているが、「however, moreover, for instance などの表現から文章の流れを理解する力」が改善されたと回答した生徒は40.0%しかおらず、半分以下であった。生徒の目標が高いために、このようなずれが生じていると考えられる。今後、生徒の読みの力を向上させるだけでなく、生徒が成長を実感し、達成感を持てるような指導を考え、実践していきたい。

## まとめ・感想

今回のアクション・リサーチを通して、取り上げた課題の解決が生徒にとってどのような意義を持つのかについて繰り返し考えた。生徒が真っ先に考えることは、おそらく大学受験や外部検定試験におけるメリットだろう。しかし、より重要なのは、読む上でのストレスが取り除かれ、読む楽しみをより味わうことにつながるということだと考える。今回の授業改善を通してそのことを再認識することができた。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店.  
島田浩史・米山達郎. (2005). 『英語長文読解の王道 パラグラフリーディングのストラテジー1. 読み方・解き方編』河合出版.

## 自信をもって社会的な話題についてやり取りする力を養う指導

科目名	論理表現 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">小集団</span>
-----	--------	----	---	----	---

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は4クラス80名（男子42名、女子38名）の生徒である。一クラス20名で、生徒との距離は近く、活動観察や生徒との意見交換がしやすい。例年、多くの生徒が四年制大学へ進学する。学習だけでなく、学校行事や部活動にも積極的に取り組む。

### 解決すべき課題

自信をもって英語でやり取りできない生徒が多くいる。英語でのコミュニケーションに慣れていない様子が見受けられ、特に、時事問題のような社会的な話題について、自分が知っている情報を述べたり、自身の意見を言ったりして、会話を継続できる生徒は少ない。また、発話は、語彙や表現、文法、音声等の点から正確とは言えない。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート（4月実施：回答者数80）

質問：あなたは英語で話すことに自信がありますか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
6人(7.5%)	10人(12.5%)	24人(30.0%)	40人(50.0%)

- ・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数80）

内容：英検準2級2次試験の英会話の問題（Q→A形式の個人の意見を問うもの）を3問、1問当たり15秒程度で回答する。

質問の例：Do you think students should learn more than one foreign language?

評価方法：自作のルーブリックによる

	Accuracy	Opinion	Consistency
A	内容理解に支障をきたすような語彙や表現、文法、音声等の誤りがなく、流暢な発音・イントネーションで話している。	質問に適切に回答しており、意見の根拠などを詳細に述べている。	自身の賛否を明確に、聞き手が理解しやすいように一貫した意見を述べている。

B	理解に支障のない程度の語彙や表現、文法、音声等で話している。	質問に適切に回答している。	自身の賛否を明確に、おおむね一貫した意見を述べている。
C	語彙や表現、文法、音声等に大きな誤りがある。	質問とは無関係な内容を話している。	自身の賛否を述べず、一貫した意見を述べていない。

結果

	Accuracy	Opinion	Consistency
A	8人(10.0%)	8人(10.0%)	4人(5.0%)
B	68人(85.0%)	62人(77.5%)	64人(80.0%)
C	4人(5.0%)	10人(12.5%)	12人(15.0%)

### <分析と考察>

アンケートにおいては、英語で話すことに「自信がある」または「どちらかといえば自信がある」と回答した割合は全体の20.0%であった。ただし、そうした生徒からも、自己紹介のように事前に用意できている日常会話ならできるが、時事問題などの社会的な話題では自信がない趣旨の発言があった。社会的な話題について、自分が知っている情報や自身の意見を正確な表現で述べられるように指導する必要があることが分かった。

スピーキングテストにおいては、「Consistency」のA評価の、聞き手が理解しやすいように一貫した意見を述べていた生徒は全体の5.0%とごく少数にとどまり、多くの生徒に、途中で主旨から逸脱したり、話題に関連する一般論や情報に触れず、自分の意見ばかり話したりする様子が見られた。時事問題等の知識、一般的な英会話で求められる英語表現を指導し、自身の意見を組み立て補強する力を身に付けさせる必要がある。

### リサーチ・クエスチョン

社会的な話題について、自信をもってやり取りする力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・第2回スピーキングテストで、全ての観点でB評価以上の生徒がそれぞれ全体の9割を超える。
  - ・第2回アンケートで、英語で話すことに「自信がある」または「どちらかといえば自信がある」と回答する生徒が全体の6割を超える。

### 改善のための手立て

- ペア・グループで社会的な話題についての英会話に取り組みせれば、聞き手が理解しやすいように一貫した内容で、自分の意見の根拠などを述べるようになるだろう。
  - ・買い物のシーンなどの会話のテーマを与え、即興で90秒間ロールプレイする活動を設ける。
  - ・ペアやグループを固定せず、様々な人と関わることができるようにする。

- 教員からの発問を増やし、やり取りを通した文法指導を行えば、発話の正確さを高めることができるだろう。
  - ・日常的な話題について教員が質問し、複数の生徒が答える活動を帯活動として行う。様々な話題について生徒の意見や考えを引き出し、自分の持っているリソースを使って言語化させる。
  - ・教員と生徒のやり取りの中で、生徒の文法的な間違いを指摘し、その場で指導する。
- インタビュー形式で定期的に教員と英会話の練習を行えば、テストの形式に慣れ、自信をもってやり取りできるようになるだろう。
  - ・英検の二次面接試験の形式での練習を定期的に行う。
  - ・英会話練習での発話内容の質や、使用した英語表現などを記録し、個々にフィードバックを行う。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回アンケート（12月実施：回答者数 80）

質問：あなたは英語で話すことに自信がありますか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
10人(12.5%)	57人(71.3%)	12人(15.0%)	1人(1.3%)

- ・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数 80）

内容：第1回と同様（質問は別）

質問の例：Do you think reading electronic books is better than reading paper books?

結果：

	Accuracy	Opinion	Consistency
A	21人(26.3%)	28人(35.0%)	24人(30.0%)
B	59人(73.8%)	52人(65.0%)	56人(70.0%)
C	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

#### <分析と考察>

第2回アンケートで、英語で話すことに「(どちらかといえば) 自信がある」と回答した生徒の割合は 83.8%で、4月から 63.8 ポイントの増加となり、改善の目安としていた6割を大きく超え、統計的にも有意差が認められた。(Wilcoxon 符号付順位検定： $p=0.00<0.05$ )。自由記述には、「英語を話す頻度が増えて次第に英語への抵抗が減っていった」、ネイティブとのプライベートな会話にも応用できるような「実際の生活で活用できる場面の練習が多く、取組へのモチベーションが上がった」などの意見が出た。英語を使用する機会を増やし、社会的な話題に注目して練習したことが効果的であったと推察される。

第2回スピーキングテストでは、全生徒が全ての観点でB評価以上となり、改善の目安とした9割を超え、それぞれ有意な向上が見られた (Wilcoxon 符号付順位検定： $p=0.00<0.05$ )。「Accuracy」の観点では、多くの生徒について発音の正確さが向上した。また、語彙や表現、文法使用について、

正確さの改善が見られた。「Opinion」の観点では、学んだ知識と英語表現を活用し、根拠などを詳細に、より説得力のある意見を述べる様子が見られた。「Consistency」の観点では、自身の発言の補強に必要な一般論などの情報を精査し、一貫した意見を述べている生徒が多かった。また、5月の第1回のテストで見られた、発言途中で沈黙してしまうような生徒はいなくなり、生徒の英語コミュニケーションへの積極性も向上したと言える。

## 教師の変化

- ・教員が毎授業後に生徒の理解度を評価するようになった。教員の主観ではなく、数的な具体的なデータを基に生徒の実態を把握した上で授業改善策を検討するようになった。
- ・適宜生徒からのフィードバックを取り入れることで、授業の質を向上させようとするようになった。

## 今後の課題（次の改善点など）

発話の正確さの向上を意識した手立ても講じたが、自信をもって英語を話す力を養うための手立てばかりに注力してしまった。また、リーディング等の他のスキルにフォーカスした指導が疎かになる部分があったことを反省している。今後は、生徒が4技能をバランス良く高めることができるよう注意したい。また、本実践の評価基準については英検の Can-do やルーブリックを参考にしてを作成したが、今後はより勤務校の生徒の実態に合うよう改善したものを作成したいと考えている。今回の取組の結果は、自身にとって満足のいくものとはなかったが、英語で話すことに「自信がない」と回答する少数の生徒を無視することなく、全ての生徒が成長を感じられるように授業改善を継続していきたい。

## まとめ・感想

1年間の取組を通して、それ以前の自身と比して、指導の目的、達成したい目標や、そのためにどのような工夫をすべきかなどを一層真摯に検討するようになった。また、毎時の授業を入念に振り返り、その反省を次の授業に生かすようになった。武蔵野大学・江原先生や玉川大学・村越先生、指導主事の皆さま、同期で研修を受講する他校の先生方から多くを学び、英語教員として大きく成長させてもらったことに感謝し、今後は、勤務校ひいては神奈川県英語教育に貢献できるよう、弛まず研鑽を続けていきたい。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

泉恵美子・門田修平(編著). (2016). 『英語スピーキング指導ハンドブック』大修館書店.

三浦省五(監修). (2004). 『英語教師のための教育データ分析入門 授業が変わる テスト・評価・研究』大修館書店.

McKay, S.L. (2002). *Teaching English as an International Language*. Oxford University Press.

## CLILの手法によるスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス117名（男子81名、女子36名）の生徒である。例年、多くの生徒が難関国公立大学を志望する。学ぶこと自体への関心の高さから、勉強に対するモチベーションが高い。

### 解決すべき課題

社会的な話題について問われた時、すぐに意見を整理できなかつたり、適切な表現が思いつかなかつたりして、即興で答えられない生徒が多く、話すことに消極的な様子が見られる。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

#### ・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数107）

内容：英検2級の問題を参考に、問1は3コマ漫画の描写、問2は社会的な話題について、自分の意見と理由・説明を述べる問題を出題した。問1は10点、問2は5点の15点満点。

問2の例：Some people say that Japanese high schools should take their students on trips abroad. What do you think about that?

評価方法：自作の採点表を用いて評価

	問1 内容	問1 語彙・文法	問2
5点	五つ程度の情報を、ストーリーが理解しやすいように工夫して描写している。	語彙・文法が適切に使用されている。	自分の意見と、理由・説明を二つ以上述べ、表現に誤りがない。
4点	四つ程度の情報を、ストーリーが理解できるように描写している。	語彙・文法がほぼ適切に使用されている。	自分の意見と、理由・説明を二つ以上述べ、表現にほぼ誤りがない。
3点	ある程度の情報を、ストーリーが最低限理解できる程度に描写している。	語彙・文法の使用に誤りや不適切な点があるが、意味理解に支障をきたさない。	自分の意見と、理由・説明を一つ述べ、表現にほぼ誤りがない。
2点	描写に重大な不足があり、ストーリーが理解しにくい。	語彙・文法の使用に重大な誤りがあり、意味理解に支障をきたす。	自分の意見と理由・説明を述べているが、論理が明確でなく、表現に誤りがある。
1点	描写に重大な不足があり、ストーリーが理解できない。	語彙・文法の使用に重大な誤りが多く、意味理解に大きな支障をきたす。	自分の意見と理由・説明を述べておらず、表現に誤りが多い。

結果：

12-15 点	30 人(28.0%)
10-11 点	39 人(36.4%)
0-9 点	39 人(36.4%)

・第1回スピーキングテスト自己評価（5月実施：回答者数 107）

内容：スピーキング能力への自信を測るため、テストでの自身のパフォーマンスを評価させた。

評価方法：自作の採点表を用いて評価

	問1	問2	全体
3点	言いたいことをうまく英語で言えた。	スムーズに質問に答えることができた。	英語でのやりとりを楽しむことができた。
2点	なんとか、言いたいことを英語で言えた。	詰まったが、なんとか質問に答えることができた。	英語でのやりとりをまあまあ楽しむことができた。
1点	言いたいことを英語で言えなかった。	質問にうまく答えることができなかった。	英語でのやりとりを楽しむことができなかった。

結果：

7-9 点	28 人(26.2%)
6 点	36 人(33.6%)
0-5 点	44 人(41.1%)

<分析と考察>

第1回スピーキングテストで10点以上を獲得した生徒の割合は全体の64.5%であった。また、第1回の自己評価で6点以上を獲得した生徒の割合は全体の59.8%であった。テストと自己評価の結果の相関を求めてみたところ、 $r=0.36$ であり、弱い正の相関があった。このことから、スピーキング能力と生徒の自信の両方を高めるような指導を行うことで、相乗効果的に両方を高めていけるだろうと考えた。

リサーチ・クエスチョン

社会的な話題に対する自分の意見や説明を、即興で自信をもって述べる力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・第2回スピーキングテストで、15点満点で10点以上を獲得する生徒が7割5分以上になる。
  - ・第2回スピーキングテスト自己評価で、9点満点で6点以上を獲得する生徒が7割以上になる。

改善のための手立て

- Small Talk を帯活動とし、長く話し続けるための指導を行えば、自分の意見や説明を即興で述べる

力が上がり、自信が向上するだろう。

- ・トピックを与え、ペアで2回の **Small Talk** に取り組ませる。1 回目はお互いに自分の意見や説明をする。終了後、言えなかった語彙、表現を調べさせる。
- ・関連語彙、会話フレームなどを提示した後、同じトピックでペアを変えて2 回目に取り組ませる。その際、100WPM を目標にワードカウンター（西、2010）で語数を数えさせる。

○ CLIL の 4 C を意識して学習を行えば、社会的な話題について考え、判断し、表現することができるようになるだろう。

- ・ **Content**（内容）：教科書の異なるパートの内容をペアがそれぞれ学習し伝え合う（**Information Gap**）。発展的な内容をオーセンティック教材（TED 教材、論文など）から学ぶ。
- ・ **Communication**（言語知識・言語使用）：教科書内容に関連した語彙・文法を学ぶ。
- ・ **Cognition**（思考）：ディスカッションを通して、教科書内容と自分自身のつながりに気づき、ライティングでそれをまとめる。
- ・ **Community/Culture**（協学・異文化理解）：ペアワーク、グループワーク、ディスカッションを通して、他者を資源として学ぶ。他者により内容を理解し、他者の意見を知り、協同的に学ぶ。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 第2回スピーキングテストの結果（12月実施：受験者数 101）第1回と同様の内容で異なる問題。

12-15 点	46 人(45.5%)
10-11 点	33 人(32.7%)
0-9 点	22 人(21.8%)

- ・ 第2回スピーキングテスト自己評価の結果（12月実施：回答者数 82）

7-9 点	16 人(19.5%)
6 点	35 人(42.7%)
0-5 点	31 人(37.8%)

#### <分析と考察>

第2回スピーキングテストにおいて、78.2%の生徒が10点以上を獲得し、全体の7割5分以上という改善の目安を達成した。*t*検定によりこの向上は有意であることが分かった（*p* 値 0.01<0.05）。第2回の自己評価においては、62.2%の生徒が6点以上を獲得したが、全体の7割以上という改善の目安を達成することができなかった。生徒のスピーキング能力の大きな伸びに対して、生徒のスピーキングへの自信の伸びはゆるやかであった。

- ・ 事後アンケート調査（1月実施：回答者数 76）

1. **Small Talk** の活動を通して英語を話す力が身に付いたと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
5 人(6.6%)	54 人(71.1%)	16 人(21.1%)	1 人(1.3%)

## 2. CLIL の活動を通して英語力やその他の力が身に付いたと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
20人(26.3%)	43人(56.6%)	13人(17.1%)	0人(0.0%)

### <分析と考察>

Small Talk を通して英語を話す力が身に付いたかの問いに、77.6%の生徒が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、おおむね肯定的であった。一方で自由記述には、自分が間違いを犯すことや、ペアの相手に迷惑を掛けることへの強い不安が見られた。生徒が興味を持ち、話したくなるトピックを与えたり、より多くの支援を与えるなどの手立てを講じる必要がある。

CLIL の活動を通して英語力やその他の力が身に付いたかの問いに、82.9%の生徒が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。自由記述には、様々な題材内容を学ぶこと及び、発展的な学習の楽しさや、英語を学ぶのではなく、英語を使って内容を学ぶ学び方を支持する意見が多く見られた。半面、高度な内容を英語で学んでも効果はないという否定的な意見も見られた。このような学習者に対しては、発展的な内容を理解するために、まずは易しい英文で理解を深めたり、日本語を利用して理解と興味を促したりしていくなどの仕掛けが必要であろう。

### 今後の課題（次の改善点など）

今回の調査で、スピーキング技能に対する生徒の高い関心が分かった。生徒のニーズは大学受験にあると決めつけず、目の前の生徒のニーズを把握し、それに合う教育活動を行うことが教員には求められる。また、CLIL は、多方面にわたる興味と高い学習意欲を持つ本校生徒に合う活動であると分かった。言語と内容の両方を深く理解して身に付けた英語力は、大学受験にもいかされると信じる。

### まとめ・感想

アクション・リサーチにおける指導を通し、スピーキングが苦手だからこそ克服しようとする向上心や、幅広い題材内容に興味をもつ知的好奇心などの、本校生徒の良い面に気づき、前よりもっと生徒のことが好きになった。また、英語中核教員育成研修において、英語教授法や言語学の理論、統計などについて学び直し、最新の知見を得たことによって、今後の教育活動にそれを積極的にいかしていこうと考えるようになった。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

奥野由紀子(編著). (2018). 『日本語教師のための CLIL (内容言語統合型学習) 入門』 凡人社.  
西巖弘. (2010). 『ワードカウンターを活用した驚異のスピーキング活動 22』 明治図書出版.

## 読んだ英文の内容を自分の言葉で伝えるスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス 118名（男子 67名、女子 51名）の生徒で、その多くが一般受験で大学へ進学する。ペアワークなどの活動に対して積極的に取り組む一方で、自身の意見を述べることは比較的苦手である。

### 解決すべき課題

生徒は既習の言語材料を工夫して表現するよりも、とりあえず英訳を調べて覚えようとする傾向があり、暗記に頼らない発話技能を育成していく必要がある。また読解で「何が書かれていたか」理解できていても、自分なりの言葉でそれを表現することが苦手である。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数 107）

#### 1. 英語を話す力を伸ばしたいと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
89人(83.2%)	18人(16.8%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

#### 2. あなたは英語を話すことが得意だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
6人(5.6%)	22人(20.6%)	38人(35.5%)	41人(38.3%)

### <分析と考察>

すべての生徒が話す力を伸ばしたいと感じていた。一方で、話すことが得意と感じている生徒は約26.2%にとどまり、話す力を十分に身に付けさせていないことが分かった。

- ・第1回リテリングテスト（5月実施：受験者数 114）

内容：指定された教科書パートの要点を、四つの絵とヒントとなるフレーズが載っているシートを見ながら1分間で述べる。解答前に1分間教科書を見て内容を思い出す時間が与えられる。

評価方法：自作ルーブリックによる評価

	内容	表現
A	要点の4分の3以上を正確な文の形で話している。	全体的に本文とは異なる表現や適切なつなぎ言葉など、自分なりの豊かな表現を使用している。
B	要点の半分を正確な文の形で話している。	おおむね本文とは異なる表現や適切なつなぎ言葉など、自分なりの豊かな表現を使用している。

C	要点の半分未満を正確な文の形で話している。	全体的に本文の抜粋となっており、自分なりの豊かな表現を使用していない。
---	-----------------------	-------------------------------------

\* 正確な文の形とは適切な主語と動詞を用いた文を指す。

結果：

内容			表現		
A	B	C	A	B	C
45人(39.5%)	30人(26.3%)	39人(34.2%)	17人(14.9%)	43人(37.7%)	54人(47.4%)

- ・第1回自己評価アンケート（第1回リテリングテスト後に実施：回答者数 91：複数回答可）

質問：難しかったポイントは何ですか。

教科書の内容を 思い出すこと	使いたい単語を 思い出すこと	単語を英文として 並べること	要点をつなが ながら話すこと	自分なりの表現 を使うこと
26人(28.6%)	50人(54.9%)	65人(71.4%)	32人(35.2%)	53人(58.2%)

その他：4人（文法を考えながら話すこと、ほか）

#### <分析と考察>

第1回リテリングテストでは約3分の1の生徒が「内容」C評価で、内容を整理して理解し、表現する力が乏しいことが分かった。またおよそ半数が「表現」C評価で、自分の言葉で教科書の内容を表現することができなかった。直後に実施した第1回自己評価アンケートでは、約7割の生徒が「単語を英文として並べること」に、「自分なりの表現を使うこと」についても半数以上の生徒が難しさを感じており、自分の言葉で正確な英文で表現する力を育成する必要があると感じた。

- ・第1回インタビューテスト（6月実施：受験者数 103）

内容：教科書の内容と日常生活を関連付けた質問に 30 秒以内で答える。（質問例：Do you think your city is bike-friendly and why? / When and how do you help your family?など）

評価方法：自作ループリックによる評価

	内容	正確さ
A	質問に明確に答え、さらに一言付け加えている。	正しい英文で話している。
B	質問に明確に答えている。	語彙や文法上の誤りを含むものの、主語と動詞を含む英文で話している。
C	質問に答えていない。または不明確である。	単語やフレーズで答えている。または語順に重大な誤りのある英文で答えている。

結果：

内容			正確さ		
A	B	C	A	B	C
47人(45.6%)	52人(50.5%)	4人(3.9%)	24人(23.3%)	57人(55.3%)	22人(21.4%)

#### <分析と考察>

「内容」B評価以上の生徒は 96.1%で、「正確さ」B評価以上の生徒は 78.6%であった。特に「正確さ」への手立てを講じる必要がある。

## リサーチ・クエスチョン

読んだ英文の内容を自分の言葉で正確に話して伝える力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・第2回リテリングテストの「内容」でB評価以上の生徒が全体の80%を超える。
  - ・第2回リテリングテストの「表現」でB評価以上の生徒が全体の60%を超える。
  - ・第2回インタビューテストの「正確さ」でB評価以上の生徒が全体の90%を超える。

## 改善のための手立て

- 文章の構成に着目した読解活動をすれば、内容を適切に説明できるようになるだろう。
  - ・ディスコースマーカーに着目して、内容を整理する活動に取り組みさせる。
  - ・適切なつなぎ言葉について学習し概要と要点を簡潔に書いたり話したりする活動に取り組みさせる。
  - ・空所補充形式のスライドを見ながら、本文の内容を適切な語彙で説明する活動に取り組みさせる。
- 読解したことに関連したディスカッション活動を繰り返しすれば、内容に関連した質問に、自分なりの言葉で正確に答えることができるようになるだろう。
  - ・ディスカッションの後で、辞書やスマートフォンなどを用いて正しい語彙や表現を確認させる。
  - ・内容を、より平易な語彙と文法を用いて表現する練習に取り組みさせる。
- 話すときのポイントを意識する指導を行えば、伝えない内容を適切に表現できるようになるだろう。
  - ・表現活動の際に「チェックリスト」を用いて自己評価をさせる。(適切なつなぎ言葉を使用しているか、理由や例が適切か、自分の言葉で話しているか、相手の言っていることが分かったか)
  - ・OREO形式で意見を話す活動に繰り返し取り組みさせる。

## 生徒の変化 (途中経過、事後の検証結果など)

- ・第2回リテリングテストの結果 (11月実施：受験者数 111)

内容			表現		
A	B	C	A	B	C
80人(72.1%)	23人(20.7%)	8人(7.2%)	51人(45.9%)	55人(49.5%)	5人(4.5%)

- ・第2回インタビューテストの結果 (11月実施：受験者数 111)

内容			正確さ		
A	B	C	A	B	C
80人(72.1%)	29人(26.1%)	2人(1.8%)	47人(42.3%)	63人(56.8%)	1人(0.9%)

- ・第2回自己評価アンケート (二つの第2回テスト後に実施：回答者数 91)

1. 前回のリテリングに比べて、今回のリテリングのほうが上達したと感じていますか。

今回のほうがうまくできた	今回のほうがやうまくできた	変わらない	前回のほうがやうまくできた	前回のほうがうまくできた
22人(24.2%)	39人(42.9%)	18人(19.8%)	7人(7.7%)	5人(5.5%)

## 2. 難しかったポイントは何ですか。

教科書の内容を 思い出すこと	使いたい単語を 思い出すこと	単語を英文とし て並べること	要点をつなげな がら話すこと	自分なりの表現 を使うこと
11人(12.1%)	36人(39.6%)	42人(46.2%)	31人(34.1%)	37人(40.7%)

その他：3人（テンパらずにしゃべること、ほか）

### <分析と考察>

第2回リテリングテストの「内容」で92.8%、「表現」で95.5%、インタビューテストの「正確さ」で99.1%の生徒がB評価以上となり、改善の目安を達成した。文章の概要と要点を的確に把握し、整理しながら自身の言葉で話したり、質問に対して正確な表現で回答する力が育ったと考える。また直後に実施した第2回自己評価アンケートでは、前回よりもうまくできたと感じている生徒が67.0%と、成長を感じている生徒が多かった。また難しかったポイントでは特に「単語を英文として並べること」が大幅に減少しており、正確に話す力の伸長を実感できた生徒が多かった。

### 教師の変化

- ・今までは生徒の困難を明確にすることなく授業をしていたが、今回のアクション・リサーチを通じてスキルを細分化し、支援するポイントを明確にしながら授業を構成していく姿勢が身に付いた。また生徒の習得状況も、より詳細に把握しようとする意識を持てるようになった。
- ・生徒が考えていることを英語で表現できるようになるためには、よく使用する単語や文法を明示的に指導し、意識的に使いやすい表現を使って言い表す練習が重要であることを学んだ。

### 今後の課題（次の改善点など）

今回は、発話の論理性の成長については確認することができなかった。来年度以降は、生徒の発話内容をより詳細に分析することで、生徒が自身の生活と関連付けながら文章を読解し、その上でそれに対する自身の考えを発信できるように、手立てを講じていきたい。

### まとめ・感想

スピーキングの力を伸ばす授業を考える際に、センターの研修で学んだこともさることながら、職場の同僚の教員と授業内容について相談する機会が多くなり、協力して生徒を支援していく関係性を強固にすることができた。他の教員と協力していくことで、より充実した授業を実践できることを強く実感した1年間だった。来年度以降も、継続して組織的に授業実践を積み重ねていきたい。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

佐々木啓成. (2020). 『リテリングを活用した英語指導－理解した内容を自分の言葉で発信する』大修館書店.

上山晋平. (2022). 『英語リテリング&ショート・プレゼンテーション指導ガイドブック』明治図書出版.

## 自分の考えを即興で自信を持って述べる力を伸ばすスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	----------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス 118名（男子 61名、女子 57名）の生徒である。ほぼ全員が難関大学を含む四年制大学への進学を希望しており、学習に対して意欲的な生徒が多い。授業中のペアワークやグループワークといった言語活動にも積極的に取り組む生徒がほとんどである。

### 解決すべき課題

スピーキング活動において、言いたいことはあるが、英語での表現の仕方が分からずつまってしまう生徒が多い。また、自分の発話中の文法や発音の正確性に不安がある様子も見受けられる。教員側としては、一人ひとりのアウトプットに対して十分なフィードバックを与えられていない状況がある。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

#### ・第1回アンケート（4月実施：回答者数 118）

##### 1. 英語を話す力を伸ばしたいと思いますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
102人(86.4%)	15人(12.7%)	0人(0.0%)	1人(0.8%)

##### 2. 英語を話す力はあなたにとって必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
104人(88.1%)	12人(10.2%)	2人(1.7%)	0人(0.0%)

##### 3. 英語を話す力に自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
2人(1.7%)	11人(9.3%)	71人(60.2%)	34人(28.8%)

#### <分析と考察>

「話す力を伸ばしたい」「話す力はあなたにとって必要」という問いに対し、「そう思う／どちらかといえばそう思う」がともに 98.3%と高い割合であった。一方、「英語を話す力」に「どちらかといえば自信がない／自信がない」が 89.0%と高い割合であった。またスピーキングに対して難しいと感じている点としては、「言いたいことが英語で出てこない」「的確な単語・文法を選び取るのに時間がかかる」「発音・文法に自信が持てない」といった内容の回答が多く見られた。

・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数118）

内容：英検準2級の二次試験 No.4 の意見を問う質問をして、それに対する生徒の応答をみる。質問は英検の過去問題より10個程度用意し、以下の自作ルーブリックに従って評価した。

質問例：Do you think students today have enough time to relax?

評価ルーブリック：

	内容 (Contents)	構成 (Structure)	話し方 (Delivery)
A	内容に一貫性があり、客観的な理由によって主張が深められている。	「主張→理由→事例・説明」の構成で話している。	声量・速度・明瞭さが適切で、強調・繰り返し等、聞き手の理解を促す工夫をしている。
B	内容に一貫性がある。	「主張→理由」の構成で話している。	声量・速度・明瞭さが適切である。
C	内容に一貫性がない。	「主張→理由」の構成で話していない。	声量・速度・明瞭さが適切でない。

結果：

	内容 (Contents)	構成 (Structure)	話し方 (Delivery)
A	60人(50.8%)	49人(41.5%)	15人(12.7%)
B	39人(33.1%)	51人(43.2%)	76人(64.4%)
C	19人(16.1%)	18人(15.3%)	27人(22.9%)

※全項目 B 評価以上の生徒は 77 人（65.3%）

<分析と考察>

「内容」で A 評価の生徒は 50.8%、「構成」で A 評価の生徒は 41.5%であった。「主張→理由」に関連する「事例・説明」を加えることに難しさを感じている生徒が多いことが分かった。また、「話し方」で C 評価は 22.9%で、声量が弱く自信を持って話すことができていない生徒や、不自然な間が開いてしまうなど速度が適切でない生徒がいることが分かった。

リサーチ・クエスチョン

意見が分かれる問題について、自分の考えを即興で自信を持って述べる力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・第2回スピーキングテストで、全項目 B 評価以上の生徒が全体の8割以上になる。

・第2回アンケートで、「4月と比べて、英語を話すことに自信ができましたか」の問いに「(どちらかといえば) そう思う」と回答する生徒が全体の8割以上になる。

改善のための手立て

○ 適切な話し方を意識した発話練習を繰り返せば、自信を持って話せるようになるだろう。

- ・日替わりのトピックで、ペアで1分間スピーチをさせる（帯活動1）。
- ・ワードカウンターを用いて WPM を計測させることで、発話量を数字で可視化する。

○ 意見表明の構成と、その際に必要な定型表現を明示的に指導すれば、自分の考えを論理的に述べら

れるようになるだろう。

- ・意見表明の例文等を用いて、「主張→理由→事例・説明」の構成を明示的に指導する。
- ・意見表明に必要なディスコースマーカ―や便利な構文・表現等を、繰り返し練習させる。

○「主張→理由→事例・説明」の構成による意見表明の練習を繰り返せば、意見が分かれる問題について、即興で自分の考えを論理的に述べられるようになるだろう。

- ・英検準2級の問題を使用し、試験官役と受験者役とに分かれ、ペアでやり取りさせる(帯活動2)。その際、「主張→理由→事例・説明」の構成を意識して取り組むよう指導する。
- ・1度目の練習後、「言いたいけれど言えなかったこと」の表現等を調べる時間を1分間取り、その後もう1度同じトピックで練習に取り組ませる。

### 生徒の変化(途中経過、事後の検証結果など)

・第2回アンケート(12月実施:回答者数118)

1. 4月と比べて、英語力に自信がつかましたか?

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
22人(18.6%)	59人(50.0%)	23人(19.5%)	14人(11.9%)

2. 4月と比べて、英語を話すことに自信がつかましたか?

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
15人(12.7%)	58人(49.2%)	29人(24.6%)	16人(13.6%)

3. 4月と比べて、英語を論理的に話す力は伸びたと思いますか?

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
9人(7.6%)	64人(54.2%)	32人(27.1%)	13人(11.0%)

#### <分析と考察>

「4月と比べて、英語を話すことに自信がつかましたか」の問いに「(どちらかといえば)そう思う」と回答した生徒の割合は61.9%と、改善の目安とした7割を達成することはできなかったが、「4月と比べて、英語力に自信」「4月と比べて、英語を論理的に話す力は伸びた」の問いへの肯定的な回答がともに6割を超えており、一定の成果はあったと考える。

・第2回スピーキングテストの結果(12月実施:受験者数118) ※テストの内容は第1回と同様

	内容 (Contents)	構成 (Structure)	話し方 (Delivery)
A	84人(71.2%)	67人(56.8%)	13人(11.0%)
B	25人(21.2%)	47人(39.8%)	86人(72.9%)
C	9人(7.6%)	4人(3.4%)	19人(16.1%)

※全項目B評価以上の生徒は97人(82.2%)

### <分析と考察>

全項目で B 評価以上の生徒は 82.2%となり、改善の目安を達成することができた。また「内容」、「構成」の A 評価の割合が 71.2%、56.8%となり、第 1 回の 50.8%、41.5%よりそれぞれ 20.4 ポイント、15.3 ポイント上昇した。より多くの生徒の意見表明の内容に一貫性があり、客観的な理由によって主張を深め、「主張→理由→事例・説明」の構成で述べることができていた。「話し方」における B 評価以上の割合は、第 1 回 77.1%から第 2 回は 83.9%となり、6.8 ポイントの上昇にとどまったが、フィルターを使って不自然な間が空かないようにするなど、練習の成果も見られた。また、118 名の事前、事後のデータについて、各項目の結果の検定 Wilcoxon の符号付順位検定を行ったところ、全項目について、統計学的に有意な向上が認められた（すべて  $p < 0.05$ ）。

### 教師の変化

授業を考えたり実際に行ったりする中で、「これをやったらどんな力を伸ばすことができるだろうか」「こんな力をつけさせたいが、どんな活動をさせるべきだろうか」といったことを考えるようになった。またほかの先生方の授業を見学すると、自分では思いつかなかったような良い実践をされていることに改めて気づかされ、校内外の先生方の授業からどんどん学びたいという思いが強まった。

### 今後の課題（次の改善点など）

今回試験範囲に追われるなどの理由で十分な実践ができずに終わってしまった手立てもあったが、スピーキングの上達には継続した練習が必要不可欠だと感じるため、今後はより計画的に実施していけるようにしたい。また、フィードバックについては今後も効果的な方法を模索していきたい。

### まとめ・感想

今回の研修を経て、日々行う授業内の活動の一つ一つに意味を持たせることの大切さを改めて確認することができた。6 年間という教員経験を経てこの研修を受けられたことで、新たなことを学ぶのはもちろん、これまでの経験を振り返りながら、英語教育について改めて考えることができたと感じる。今後は生徒の各スキルをより高められるようなタスク設定を心掛けていきたい。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

上山晋平. (2018). 『はじめてでもすぐ実践できる！中学・高校 英語スピーキング指導』学陽書房.

Brown, S. & Larson-Hall, J. (2012). *Second Language Acquisition Myths*. The University of Michigan Press.

植田一三. (2016). 『英語スピーキング力 4 技能+α で全方位から集中攻略』クロスメディア・ランゲージ.

## 基礎的な書く力を伸ばす指導

科目名	英語コミュニケーションⅢ	学年	3	形態	HR・習熟度・ <b>小集団</b>
-----	--------------	----	---	----	--------------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス46名（男子20名、女子26名）の生徒である。ペアワークやグループ活動に積極的に参加するが、英語に対して苦手意識を持っている生徒が多い。例年、約80%は進学するが、一般入試を受験して進学する生徒は少ない。約20%の生徒は卒業と同時に就職している。

### 解決すべき課題

多くの生徒が基礎的な英語力を十分に身に付けておらず、書くことに対する苦手意識が見受けられる。まとまった英文を書く経験が少なく、文章の構造やアイデア生成に関する知識も不足している。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

#### ・第1回アンケート調査（4月実施：回答者数46）

##### 1. 英語の学習は楽しいですか。

楽しい	どちらかといえば 楽しい	どちらかといえば 楽しくない	楽しくない
9人 (19.6%)	20人 (43.5%)	14人 (30.4%)	3人 (6.5%)

##### 2. 英語を書く力に自信がありますか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
1人 (2.2%)	5人 (10.9%)	21人 (45.7%)	19人 (41.3%)

#### ・第1回ライティングテスト（5月実施：受験者数46）

内容：英検3級のライティング問題1問を制限時間20分で実施した。

トピック：「理科の授業で星について勉強することは好きか」

評価方法：JTEとALTがそれぞれルーブリックを用いて評価し、カッコ内の点数で総括した。

	内容	構造	正確さ
A (5点)	内容に一貫性があり、例・理由などに説得力がある。	主題文、支持文、結論文が確立し、さらに結論文に工夫が見られる。	主語、動詞が適切に使用されている。
B (3点)	内容に一貫性がある。	主題文、支持文、結論文が確立している。	主語、動詞のエラーがほとんどない。

C (1点)	内容に一貫性がない。	主題文、支持文、結論文が 確立していない。	主語、動詞のエラーが三つ 以上ある。
-----------	------------	--------------------------	-----------------------

結果： ※JTE と ALT による評価の組み合わせ (カッコ内は合計点)

	評価(点)	内容	構造	正確さ
第 1 回	AA(10点)	6人(13.0%)	2人(4.3%)	1人(2.2%)
	AB(8点)	6人(13.0%)	9人(19.6%)	3人(6.5%)
	BB(6点*)	14人(30.4%)	5人(10.9%)	9人(19.6%)
	BC(4点)	7人(15.2%)	8人(17.4%)	11人(23.9%)
	CC(2点)	13人(28.3%)	22人(47.8%)	22人(47.8%)

\*ACの組み合わせで評価された生徒はいなかった。

JTE と ALT の評価が共に、全項目で B 評価以上になった生徒数 (割合) は 11 人 (23.9%)。

### <分析と考察>

「英語の学習は (どちらかといえば) 楽しい」と回答した生徒の割合は 45.7%だったが、「英語を書く力に (どちらかといえば) 自信がある」と回答したのは 13.0%と非常に少なかった。テストの結果、「内容」「構造」「正確さ」全項目で B 以上になった生徒の割合は 23.9%であった。評価項目別にみると、「構造」と「正確さ」で JTE と ALT 両方で C 評価の生徒の割合が 5 割近くに上った。

「構造」に関しては基本的なパラグラフの構造の指導、「正確さ」に関しては基礎的な文構造、特に主語と動詞の理解についての指導が必要であることが分かった。

### リサーチ・クエスチョン

自分の考えを明確かつ論理的に、相手に伝わりやすく書く力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安: 英検 3 級のライティングテストにおいて、全項目で B 評価以上の生徒が 7 割以上となる。

### 改善のための手立て

- アイディアの出し方とまとめ方を指導すれば、自分の考えを明確に書けるようになるだろう。
  - ・ マインドマップによりアイディアを可視化させる。
  - ・ ペアでアイディアを出し合う活動をさせる。
  - ・ 上手に書いている他者の文を参考にし、自分のアイディアを加えた文を作成させる。
- パラグラフの構造を明示的に指導すれば、論理的な文で書けるようになるだろう。
  - ・ 主題文、支持文、結論文の構造を指導する。
- 文構造へ注意を向ける習慣付けの指導をすれば、正確に書けるようになるだろう。
  - ・ 作文の都度、主語と動詞があるか確認させる。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回及び第3回ライティングテスト（7月及び11月実施：受験者数 46）

内容と評価方法：第1回と同じ

トピック：第2回「どこで宿題をするのが好きか」、第3回「駅の近くと駅から離れた場所、どちらに住みたいか」

結果： ※JTE と ALT による評価の組み合わせ（カッコ内は合計点）

	点数(評価)	内容	構造	正確さ
第2回	AA(10点)	35人(76.1%)	21人(45.7%)	13人(28.3%)
	AB(8点)	7人(15.2%)	7人(15.2%)	5人(10.9%)
	BB(6点*)	3人(6.5%)	13人(28.3%)	16人(34.8%)
	BC(4点)	0人(0.0%)	4人(8.7%)	3人(6.5%)
	CC(2点)	1人(2.2%)	1人(2.2%)	9人(19.6%)
第3回	AA(10点)	12人(26.1%)	21人(45.7%)	16人(34.8%)
	AB(8点)	25人(54.3%)	18人(39.1%)	8人(17.4%)
	BB(6点*)	7人(15.2%)	2人(4.3%)	16人(34.8%)
	BC(4点)	1人(2.2%)	3人(6.5%)	2人(4.3%)
	CC(2点)	1人(2.2%)	2人(4.3%)	4人(8.7%)

\*ACの組み合わせで評価された生徒はいなかった。

全項目がB評価以上になった生徒数（割合）の比較

第1回（5月）	第2回（7月）	第3回（11月）
11人(23.9%)	34人(73.9%)	34人(73.9%)

- ・第2回アンケート調査（11月実施：回答者数 46）

1. マインドマップについて学んだことは、自分の考えを明確に書くことに役に立ったか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
12人(26.1%)	30人(65.2%)	4人(8.7%)	0人(0.0%)

2. 主題文、支持文、結論文の構造を学んだことは、論理的な文を書くことに役立ったか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
21人(45.7%)	23人(50.0%)	2人(4.3%)	0人(0.0%)

3. 主語と動詞があるかどうか自分で確認したことは、正確に文を書くことに役立ったか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
15人(32.6%)	30人(65.2%)	1人(2.2%)	0人(0.0%)

### <分析と考察>

第3回ライティングテストで全項目でB評価以上の生徒は73.9%と7割を超え、改善の目安に達することができた。また第1回と第3回の結果について Wilcoxon の符号付順位検定にかけたところ、3項目すべてにおいて有意な向上が認められた(すべて  $p=0.00$ )。結果について項目別に分析した結果、第3回のテストで「内容」について97.8%の生徒がBB以上となった。第2回アンケート調査によると、91.3%の生徒が「マインドマップについて学んだことは、自分の考えを明確に書くことに役に立った」と「(どちらかといえば)思う」と回答しており、マインドマップの作成が思考の整理を助けたと考えられる。「構造」に関連して、第2回アンケート調査で95.7%の生徒が「主題文、支持文、結論文の構造を学んだことは、論理的な文を書くことに役立った」と「(どちらかといえば)思う」と回答している。第3回のテストでは「構造」についてAB以上の割合が大幅に増加した。「正確さ」について、BC以下の割合は第1回で71.7%だったが、第2回で大きく減少し23.9%、第3回では13.0%にまでなった。第2回アンケート調査でも97.8%の生徒が「主語と動詞があるかどうか自分で確認したことは、正確に文を書くことに役立った」と「(どちらかといえば)思う」と回答しており、「正確さ」に関する指導の効果は割と早く現れることが分かった。

### 教師の変化

以前は生徒の反応を気にして、指導理念や教育方針を自覚せずに授業をしていたが、理論を学び自分の授業を批判的に振り返ることによって、自信をもって授業ができるようになった。また生徒に活動の意義を理解させながら授業を進めることで、生徒の参加意欲が高まり、授業改善への意欲も向上した。

### 今後の課題(次の改善点など)

JTEとALTの評価にはばらつきが見られた。複数の評価者が統一理解の基に採点ができるよう、事前にルーブリックについての打ち合わせを実施し、基準をできるだけ統一すべきであった。また今後は主語と動詞のエラーだけでなく、他の文法的なエラーも考慮し、包括的な分析を行いたい。

### まとめ・感想

勤務校でライティングを指導することは、どこかで難しいと感じていた。しかし生徒たちは予想以上に私の熱意を感じ取ってくれ、熱心に取り組み、良い結果を出してくれた。この経験は、私と私の生徒たちに自信を与えることにつながった。また自分の授業を見て下さり、忌憚のないアドバイスをくださった先生方に心から感謝申し上げたい。アクション・リサーチは、周囲の先生方の協力があつてこそ成り立つものだと実感した。今後は、ほかの先生方や生徒たちにこの成果を還元していきたい。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

大井恭子(編著). (2008). 『パラグラフ・ライティング指導入門 中高での効果的なライティング指導のために』大修館書店.

上山晋平. (2020). 『ニガテな生徒もどんどん書き出す! 中学・高校英語 ライティング指導』学陽書房.

令和6年度 英語教育中核教員育成研修

担当者 (50音順)

池田 知子 (いけだ ともこ)

ウォーリー, ジェイコブ (WHALLEY, Jacob)

大石 智子 (おおいし ともこ)

大槻 遼平 (おおつき りょうへい)

鎌田 淳司 (かまだ じゅんじ)

グエン, トア (NGUYEN, Thoa)

高取 純子 (たかとり じゅんこ)

パリセ, ピーター (PARISE, Peter)

プラム, ケネディ (PULLUM, Kennedy)

増島 真子 (ますじま ちかこ)

松井 英 (まつい ひかり)

宮田 春奈 (みやた はるな)

村越 みどり (むらこし みどり)

---

令和6年度 英語教育中核教員育成研修

授業改善プロジェクト 報告書

—アクション・リサーチによる高等学校英語授業での実践研究—

発行日 令和7年3月11日

編集 神奈川県立総合教育センター

(担当) 高取 純子

発行 神奈川県立総合教育センター

藤沢市善行7-1-1

TEL 0466(81)1635

---